撃墜王は地に堕ちる

綾春

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『次会うときは、１０倍強くあろう』

子供同士の馬鹿な約束。それを真剣に守ろうとした少女、道真　風翔は、地元たる瀬渡の海で鍛えた技術と共に、聖地とも言える四島の地にやってきた。

本気で強くあろうとするあまり、彼女が知らぬ間にか踏み外してしまっていた道。再び王道を踏みしめ、真っ直ぐな気持ちで親友と戦うために。久奈浜学院フライングサーカス部のメンバーと共に、新たな道を這って往く。

目次

新天地にて 1
新たな地で 1
久奈島の空 14
撃墜王 23
負けたくない、負けられない
久奈浜学院 32
変化 41
高藤学園 49
正統派 56
再起 65
正しい飛び方
鳥籠 70

新天地にて
新たな地で

風が吹いていた。潮の香りを多分に含んだ湿った風が頬を撫でる。
「ねぇ、ふーちゃん」
「なぁに？」
短い銀髪をたなびかせるのは、私と同じくらいの女の子。その紅い瞳には、うっすらと涙が浮かんでいるように見えた。
「……私はもう、行っちゃうけど」
彼女はもうここにはいなくなる。この瀬渡内の海から、離れていってしまう。
「次に会うときには、１０倍強くなっていようね」
「１０倍、強く……」
それが途方もない数字であることは分かっていた。でも、今の私ならできる気がして。
「うん。約束する。次会うときは、１０倍強くあろうね」
「……うん！」

ぼぉおおん…　汽笛が響く。出航が近いのだ。
「じゃあ、行かなきゃ」
「元気でね……元気でね！　ここちゃん！」

銀髪の少女、ここちゃんはフェリーに乗り込み、蔵橋島を去ったのだった。

ちりちりと額を温める陽の光に、心地よく目が覚めた。
波の音、風の音。窓の外には初めて見る景色が広がっていた。
「んっ……もう着いたの」
相当にだらしない体勢で寝ていたようなので、寝癖等がないか手鏡でチェックする。透き通るような水色の髪は、セミロングの先まで滑らか。寝癖は大丈夫そうだ。瞳も琥珀色に澄んでいる。充血はしていなそうだ。
んぅぅっ……っと声を漏らしながら伸びをして、重たい荷物を担いで席を立つ。デッキへ続くドアを開くと、海風が優しく頬を撫でた。
「……来ちゃったなぁ」
四島市、久奈島。『フライング・サーカス』の聖地に、私は足を踏み入れた。

四島は、アンチグラビトンシューズが推奨される特区。それなら近くに停留所があるはずだと思い辺りを見回すと、予想通りそれは見つけられた。地元にあったそれよりも少々小さいように思える。
緑のマットを踏みしめて、ランプが青になるのを待つ。ランプが青に光り、発進許可を下す。
「ＦＬＹっと」
つま先立ちのように体勢を作ると、ハイカットスニーカー風のグラシュから、小さな翼のようなエフェクトが出現する。それとほぼ同時に、上方へと体を引っ張る浮遊感。
重力の縛りから解き放たれ、私は空に躍る。

空から久奈島を眺める。森林が成す割合が多く、その中にぽつり、ぽつりと集落がある。まさに田舎といった感じであったけど、地元も似たようなものであったことを思い出した。

「まぁ、どこもそんなものだよね」
グラシュは法的な立ち位置が難しい。グラシュそのものの危険性は薄いが、航空機との接触事故などの危険性があるのだ。そこでこういう離島で試験的に運用されている。
つまり裏を返せば、グラシュが自由に使える場所は田舎とも言えるのだ。
一旦停止して、スマートフォンで場所を確認する。目的地まではすぐそこだ。
結構な高度まで来てしまった。ゆっくりと降下しながら、停留所を目指した。

スタッ、と停留所に着地する。それと同時に重力に引っ張られた荷物が自己主張を始めた。
「う〝っ……重い……」
大まかな荷物は先に送ったとは言え、一人暮らしの道具を一人で持ってきたのだから当然だ。ボストンバッグをしっかりと持ち直して、家へと向かう。
一人暮らしをするにあたって、昔親戚の人が住んでいた家を借りることになった。新興住宅街の中にある比較的新しい家だけど、建ててすぐに転勤が決まって、手放すのも気が引けて持っていた、ということらしい。
「にしても、一人暮らしで一軒家ってのも、なんかなぁ」
持ってきている荷物もそんなに多くない。タンス等の家財くらいのものだ。聞く所によると2階建てでそれなりに広く、ガレージもあるんだとか。使い道がないよ。
マップが示す自宅にたどり着いた。確かに、大きな一軒家だ。建てたのも最近とあって非常に綺麗。庭もそれなりの広さあり、聞いていた通りシャッター付きのガレージがある。

よいしょ、とオッサン臭い声を上げて玄関前に荷物を下ろした。するとちょうど真横に位置する、おとなりさんの玄関から人が出てくるところだった。

桃色のロングヘアに、どこから持ってきているのか気になるサイドテール。大人っぽく整った顔立ちには幼げな笑顔が浮かんでいた。

「あ、こんにちは～」

緩く、可愛らしい声でそのピンクの少女は私に挨拶をした。

「あ、初めまして。今日から引っ越してきました、道真（ミチザネ）　風翔（フウカ）です。風に翔って書いてふうか、って読みます」

「わぁ、初めまして！　いいお名前ですね、空を飛ぶのにピッタリです！」

その感性はわからない。確かに、女の名前に『翔』が入っているのは珍しいとは思うけど。

「私は倉科明日香です。久奈浜学院に通ってる2年生です」

「あ、私も久奈浜に転校するんです！　3学期から同級生ですね！」

「すごいです！　こんな偶然ってあるんですね～」

ぱぁ、っと倉科さんの笑顔が炸裂した。眩しいな、この人の笑顔は。直視できないくらいに。

……ん、待て？　倉科明日香ってどっかで聞いた気が――

――思い出せないので、気のせいだったと処理した。

「わぁっ、もうこんな時間だ！　ごめんなさい、私部活があるので！」

「あ、すみませんお時間取っちゃって！　お気をつけて！」

明日香さんは時間を確認したスマートフォンをスクールバッグに突っ込みながら走り出した。

お隣さんとの関係は良好。楽しい日々になりそうだ。

手続きは概ね済ませてきていたので、私は空いた時間を利用して買い物に出てきていた。料理できる環境があっても、食材が無くちゃ料理は出来ない。買い出しのついでに、街の雰囲気も見ておきたかった。

停留所から飛んで、あまり遠くない距離に商店街がある。活気があるとは言えないが、今すぐシャッター街になるとも思えない、他の地方都市とは少々違う雰囲気の商店街だ。

「いや～、買った買った」

最初はスーパーマーケットでちょっと買い物をしただけだったのだが、隣接している市場や薬局で買い物をするうちに、両手にいっぱいの荷物を担いでいた。まぁ、持ってきていないけど必要なモノもたくさんあったし、無意味な買い物ではないはずだ。

ピコピコとやかましいゲームセンターの脇を通り過ぎると、私はあるお店に目を惹かれていた。

「スカイスポーツ……白瀬」

外から見た感じ、ＦＣに代表されるスカイスポーツのお店のようだ。気になって、ドアを開く。

「いらっしゃいませ！スカイスポーツ白瀬へようこそ！」

挨拶をしてきた店員さんは、全身筋肉隆々のマッチョと称するにふさわしい青年だった。年は……同じくらいだろうか？

白瀬と名の付く店だったから少々期待したのだが、期待するだけ無駄だった。そりゃあそうか。あそこまでの有名人、こんな小さな店に留まるスケールじゃないよね。

「……あ、インベイドの新作だ。へー…　オールラウンダー用とか出したんだぁ…」

「おっ、インベイドがお好みかい？　お目が高いねぇ」

あ、この店員さん話しかけてくるタイプの人か。面倒だなぁ。

「いえ、私はアブルホール社のグラシュが好みなので……」

アブルホール社。いつもトリッキーなグラシュを出すことで割と

有名なメーカーだ。私のグラシュはアブルホールの『エンゲイジ』。ファイター用にカリカリに弄り倒されたオールラウンダー用グラシュ、即ち純正魔改造品である。

「アブルホールかぁ……あそこもそろそろ新型を出すらしいぞ。何でも『スラスト』とかいう、加速・最高速に思い切り振ったグラシュだとか」

「へぇ……」

そうは言われても、私はエンゲイジから変えるつもりはないのだけれど。

ありがとうございましたーとの挨拶を背に、私はスカイスポーツ白瀬を後にした。

圧力鍋を火にかけながら、私はリビングの机で作業をしていた。

グラシュの分解整備。これはスカイウォーカーとして欠かしてはいけないことだ。…と思っているのはきっと私くらいで、本当は分解する必要なんてない。だけど、細々なデザイン部に砂や塩が付いているのが嫌な私は、せめて掃除だけでもとよく分解整備をする。

無意味に引かれたモールドでも、それはグラシュのデザインの一部だ。しっかりと汚れを落としてやらないと可哀想だから。

ボロ布と、先ほど買ってきた綿棒で隅々まで掃除する。そもそも今日は飛んでいないから必要ないとも言えたけど、やっておきたい日課だった。

アブルホール社のエンゲイジは、ボディ色は海のように深い青。コントレイルは銀とも白とも言える明るい色だった。最初は私がグラシュを履くきっかけになった少女と同じメーカーだから、と使い始めたアブルホール社のグラシュも、今はお気に入り。これで同社の商品

を使うのは2機目だ。
エアスプレーで浮き上がったゴミを飛ばして、軽くティッシュで拭き取る。作業が終わる頃に、圧力鍋の中身も完成の時間だ。
リビングの隅にグラシュを置いて、キッチンに向かう。炊飯器からつやつやのご飯を器に盛って、圧力鍋の中身であるビーフシチューは深皿に。
「……うんっ」
我ながら美味しそうだ。でも少し作りすぎたかな？
「倉科さんに持って行ってあげようかな」

インターホンを押すと、パタパタという足音に続いて少女の姿が。
「あ、風翔ちゃん。こんばんは～」
「はい、こんばんは、倉科さん」
倉科さんはいちご柄のパジャマを着ていた。何だか彼女の印象そのままで思わず笑ってしまった。
「な、何ですかいきなり笑って！　……って、その手のものは？」
「あぁ、ごめんなさい。ちょっと作りすぎちゃったので、お近づきの印にでもと。ビーフシチューです」
倉科さんは鍋の中身を興味深そうに覗いて。
「わぁ……美味しそうです！　ありがとう、風翔ちゃん！」
「いえいえ。私も食べきれませんから」
鍋を渡す。それで帰ろうとする私に、倉科さんが言う。
「明日は何か予定があったりします？」
「あ、はい。ちょっと学校に手続きを…」
「じゃあ、一緒に行きませんか？　私も部活があるので」
にこにこと笑顔で言う彼女。こんなの断れる罪な女がいるのだろうか。男はもっと。
「はい、一緒に行きましょう、倉科さん」
「明日香、でいいですよ。じゃあ、また明日！」

「……また明日！」

場所が変わると眠れなくなる。きっと誰しもそうだろう。

ベッドも布団も枕も一緒なのに、私は妙に寝つきが悪かった。窓から照らす月明かりのせいだろうかと思いカーテンを閉めても結果は一緒。

「んー……」

ふとスマホの電源を入れる。ＳＮＳを開くと、母親からの通知が何件か。それを返して、ふと友達欄を開いた。

そこには、一人のお気に入りが。私が唯一無二の親友だと思い、そしてそう思うが故に何年も連絡をとっていない少女だ。

「頑張るね、私」

かつての１０倍。それが私の目標。そして、彼女と大会で戦う。その日を目指して、私は頑張ってきた。

目を閉じると、それまでとは打って変わって眠気が襲ってきた。

「おはよう、明日香さん」

「おはよ～」

玄関を出るタイミングが偶然にも重なって、私たちは笑いながら学校に向かう。

「風翔ちゃんは停留所の使い方は分かるんですか？」

「うん、大丈夫。地元もグラシュは結構使われてたからね」
私の地元は廣島県。その中でも瀬渡内海に浮かぶ島々をグラシュ特区とした『瀬渡内特区』の生まれで、グラシュは普及当時から使っていた。ほんの少しだけこっちとは勝手が違うのだけど、それも昨日のうちに慣れてしまったから大丈夫だと思う。
「そうなんですね～。という事は、どこかの島の生まれなんですか？」
停留所から飛び立ちながら会話は続く。
「廣島県です。蔵橋島ってところから。……」ＦＬＹっ」
学校まではそう遠くなかったはずだ。こんな他愛もない会話をしていれば、すぐだろう。

停留所に着陸する。久奈浜学院は私が思っているよりも遥かに小さな学校だった…　いや、私の想像が大きすぎただけだと思うけど。
「じゃあ、私は職員室に行くので」
「うん、じゃあ私は部活に行きます！」
カバンをしっかりと肩にかけ直してから。
「あっちで『フライングサーカス部』やってるので、是非見学に来てくださいね！」
そう言って駆けて行ってしまった。

――フライングサーカス部。
「あっ!!」
外れていたピースが噛み合った気分になった。倉科明日香…　どこかで聞いたと思ったら、前回大会の覇者じゃないか。通称「青空の魔術師」。ＦＣ協会にバランサー・オフの禁止令を敷かせる原因を作った張本人だ。バランサー・オフを認めることで更に開く選手間の実力差を考えてのこと。普通の人はバランサー・オフなどまともに立つことも出来ないのに。
そんな彼女をどうして忘れてしまっていたのかは至極簡単な理由。普通は出てしまう『強者のオーラ』を微塵も感じなかったからだ。

「あの人が……」
私よりも遥かに強い。それは考えるまでもなく分かっていた。だが、こうも恐怖を感じない人物だと知ると、どうしても同列程度に考えてしまう自分がいた。

書類手続きや先生方への挨拶を終わらせて、私はある場所を目指していた。
「あっち、って……」
どっちだよ。そう思いながらも、指さされた方向を目指して空を飛んでいるところだった。
周りをキョロキョロと見回しながら飛んでいると、海岸に、薄目で見れば分かるくらいのコントレイルが見える。
「……あそこか」
全然『あっち』じゃないじゃないかと思いながら、ゆっくりと降下していく。

近づいてみれば、実践練習の途中だったようだ。飛んでいるのは…　見覚えが有る。長い黒髪を振り回しながら必死に飛び回るのは、急成長株の鳶沢みさき。そしてその相手は…
「日向、晶也……」
知っている。知らない訳が無い。私もスカイウォーカーとしては古参の部類だ。彼を知らないなんて、常識がないと言われても過言ではない。
ジュニア最強。日本なんて枠に収まるわけない超人。そして、ある日突然翼を畳んだ少年だ。
「キレイ……」

暴力的なほどに鋭角な鳶沢さんのコントレイル。それに対し、常に曲線的で滑らかな日向さんのコントレイル。混ざり合って金色に近い輝きを見せる。

「あ、風翔ちゃん！　来てくれたんですね！」

「うん。この練習を見て、私もうずうずしてたところ」

「凄いですよね！　私もこのくらい飛べたらなぁ」

明日香さんは、純粋な瞳で空を見上げていた。今の言葉は、人によってはグサリと胸に刺さるものだった。だけどこの瞳を見て、人を傷つけるために言ったものではないと理解できる。

――彼女の好奇心は、底なし沼のようだ。そう思った。

「……明日香先輩、この方は？」

その声でハッとなる。明日香さんの隣には、少し小さな女の子が立っていた。亜麻色のツインテールで、浮かんでいる表情をひとことで表すなら、不審、である。

「ミーティングで言った、風翔さんですよ」

「あー、明日香先輩のお隣さんって言ってた……有坂真白です。よろしくお願いしますね、風翔先輩」

「うん、よろしくお願いします、有坂さん」

警戒心が強そうだが、いい子のようでよかった。

そこへ、飛んでいた2人が降りてきた。二人共疲労困憊、といった感じだ。

「みさき先輩！　お疲れ様です～っ！」

「あーうん、ありがとありがと」

鳶沢さんは適当にあしらっている。アレか、有坂さんは愛が重いタイプか。ていうか2人はそういう関係なのか。

「コーチ、お疲れ様です！」

「おう、お疲れ。じゃあ次は明日香と真白な。最初は真白が上を取って攻撃、続けて明日香が上から。ポイントを取るごとに交代して、それを12セット」

「「はい！」」
　前回大会では日向さんはコーチ専任だったはず。それが今飛んでいるという事は、選手も兼任なんだろう。
「……ん、キミは？」
「ホントだ。自然と溶け込んでて気付かなかったよ」
　二人の視線がこちらに向けられる。そりゃあ、さっきまでいなかった人物が急に現れたらこうなるだろう。
「明日香さんから聞いてませんでしたか？　３学期から転入する道真風翔です」
「見学に来るって言ってたっけか。いらっしゃい、久奈浜学院ＦＣ部へ。部長の日向晶也です」
「はーい、鳶沢みさきでーす」
　対照的な挨拶を受けて、私は二人と握手をした。そして、飛び始めた上空の二人に目を向ける。

「どうです？　ウチの練習は」
「そうですね。実践的でいいと思います。少人数だからこそ捗る練習ですよね」
　１対１で、シチュエーションに合わせて試合形式で進める練習。大人数だと効果的とは言い難いが、少人数での練習なら、二人の細かな問題点や良さを見つけるのにちょうどいい。
「……道真さんは、ＦＣはやってるんですか？」
「はい。瀬渡内で少々」
「瀬渡内ですか。あっちもレベル高いですよね」
　四島ほどではないが、瀬渡内もそれなりのレベルを誇るＦＣの聖地だ。……まぁ、それでは足りないと思ったから私は四島に来たわけだが。
「という事は、ここでも続けると？」
「そのつもりで、顧問の先生にも挨拶してきました」
　そう言うと、日向さんはこちらに向き直った。

「……グラシュは、持ってます？」
「はい。いつでもプレイできるようになってます」
そう答えたら、日向さんは少しニヤリと笑った気がした。
「見てるだけってのも退屈でしょう。ちょっと、試合していきませんか？」
「――――えっ？」
こうして、四島で初の試合は、部内の練習試合となったのだ。

久奈島の空

部室があると言われて一人歩いてきた場所には、廃バスが一台あるだけだった。リアに立てかけてある『フライングサカース部』の看板に気づくのには相当の時間を要した。

ドアを開くと、そこは確かに部室っぽい。バスらしさはシートや昇降口くらいのものだ。

そして机に向き合って考え事をしている少女が一人。紺色に近い青のロングヘア。どこか小型犬を思わせる見た目だと思った。

「あの～……」

「ひゃっ!?は、はひっ！」

「ここが、ＦＣ部の部室ですか？」

「あ、キミが見学生ちゃんね。私はマネージャーの青柳窓果。ロッカーは奥だから、適当に使っていいよ、風翔ちゃん」

「あ、はい。ありがとうございます……」

忙しいようだ。スマートフォンの電卓アプリを起動して、何やら計算している。部費だろうか。

フライングスーツに着替える。私のスーツは青を主体に黒と白が差し色になっている。この体型になってからずっと愛用しているもので、もうだいぶ馴染んできた。

そして、昨日念入りに整備したエンゲイジに足を通す。ここ数週間感じなかった、心地よい重みだ。

「お借りしました。じゃあ、失礼します」

「はい、頑張ってね～！」

砂浜に着地すると、既に先ほどの練習は終わっているようで、全員が砂浜に座って休憩していた。

「…お、戻ってきたね。じゃあ、軽くアップしようか。俺はここで

待ってるから」
「はい！　よろしくお願いします！」
　飛び立つ皆に続いて、私も飛び上がる。
「ＦＬＹっ！」

「キレイに飛ぶなぁ……」
　あのグラシュ、アブルホール社とかいうマイナーメーカーのやつだ。名前は確かエンゲイジ。原型である『マーメイド』というオールラウンダー用のグラシュをファイター用にアブルホール社自らカスタマイズしたもので、みさきが使っているインベイドのレーヴァテインよりもピーキーな面が目立つ。初速が速すぎるからだ。逆に最高速はかったるいほどに遅かったと記憶している。
　そんなグラシュで、まるで泳ぐように滑らかに飛ぶ彼女はかなりの実力者と見える。そのコントレイルはまっすぐ極まりない。ブレが少なく、スピーダーをやらせても速そうだ。だが、エンゲイジを履いているという事はファイター。ドッグファイトでどう飛ぶか。楽しみで仕方がない。

　軽くフィールドフライを済ませた集団が降りてくる。今のフィールドフライで大まかな実力が見えたので、誰と戦わせるか。
「まず、みさきと戦ってもらう。勝ったら明日香ともお願いできるかな」
「はい、私なんかでよければ是非」
「え～、私、中ボスなの～？」
　みさきが言う。明日香を先に戦わせたらみさきが戦う機会無いだろうが。
「ボスにしてやっただけ有難いと思え。それに、明日香に及ばないの分かってるだろ？」
「ぐ……分かってるけど……最近メンブレンの操作も分かってきたと

ころだもん」
「じゃあマスターして明日香に勝てたらラスボスにしてやるよ。ほら、準備しろ」
「はーい。とぶにゃんっ」
「じゃあ、私も。ＦＬＹっ」
白と金のコントレイルが空に描かれる。二人がファーストブイに並ぶ。
「じゃあ、真白。審判を頼む」
「仕方ないですね。じゃあ、いくにゃん！」

「一応インカムは繋がってるけど、基本的にセコンドはしない。相手を見失ったら、聞いてくれたら教える」
「りょーかい」
「分かりました！」
二人はいい緊張感のようだ。会話は無いが、笑顔を交わしている。
「セット！」

真白の可愛らしい声で、試合開始前の合図。

「ぷおおおおん!!!」
ホイッスルの真似事で切られたスタート。二人はセカンドブイめがけて飛んでいく。

「やっぱり、スピードはみさきの方が上だな」
レーヴァテインもかなりファイター寄りのグラシュだが、エンゲイジに比べればだいぶ速度は出る。風翔もセカンドブイは取れないと判断したのか、ショートカットしてセカンドラインへ。

速度に勝るみさきが、悠々とセカンドブイにタッチする。1対0。

「いっくぞ～！」

みさきは上下左右にフェイントをばら撒きながら、速度をじわりと落として接近する。のっけからドッグファイトをやらかす気だ。

左にみさきの体がブレる。恐らく、これはフェイント。本命は――

―

バチィッ！　電撃のようなエフェクトと共に、みさきが後方に弾かれる。

「えっ!?」

今のフェイントは完璧だった。左に行くと見せかけて上を突破しようとした。しかしそれは、伸びてきた手に邪魔される。

「行きますッ！」

初速に極限まで振られたエンゲイジは、みさきの立ち直りよりも早く風翔の体を加速させる。みさきは必死に背中を隠し、手で払うことに成功した。しかしそれは、その場しのぎに過ぎない。

ポイントフィールドがみさきの背中に発生する。1対1だ。

押された勢いを利用して、みさきはサードブイを目指す。しかし、その行き先には既に風翔の姿。

「……すごいな、エンゲイジってあんなに速いのか」

真白を出さなくて正解だったと思う。スピーダーがあんなのに絡まれたら最後、延々と前進できずいびられて終わりだ。

あの反射神経の塊みたいなみさきですら、さっきから防戦一方だ。でも、まだあいつには隠し玉があるからな。やられっぱなしという事はないはずだ。

バチッ、バチッとメンブレンが触れ合う。最高速の伸びないファイター用グラシュ。彼女のエンゲイジはその特色を更に濃くしたようなシロモノだ。一度抜かれたら、ブイ2つは持っていかれる。それを

知ってのこの戦略なのだろう。絶対に先には行かせない。セカンドラインで勝負を決めると。

「この感じ……」

すぐに思い出した。乾沙希だ。初めて乾と戦ったときも、この気持ちを抱いた。もどかしさ、そして恐怖だ。

ドッグファイトを嫌ったみさきが、メンブレンの操作で距離を取る。濃度を変え、まるで床を蹴り上げるかのようにターンする、「エアキックターン」だ。速度はみさきの方が速い。ともかくここは、距離を取るのが先決だと考えたのだろう。俺でもそうする。

「にしても、みさきもメンブレンの操作が上手くなったよなぁ」

明日香に教わり、急速に成長を遂げている。明日香や真白と違い吸収スピードは早くない。だが確実にモノにしている。

しっかりと速度を乗せたみさきが、大きくターンして、再び風翔に近づいていく。速度を殺さない、いい動きだ。そしてリバーサルを警戒してかキリモミを入れて背中を取られまいとしている。みさきのFC脳は急激に鍛えられている。新人戦からそれは顕著だった。

風翔はそれに対し攻撃を加えはしなかった。代わりにまるで瞬間移動するかのような速度で降下し、少し降りたところでぐっとしゃがみこんだ。

「何をする気だ……？」

距離を取るでもない。かと言ってフェイントするには距離がありすぎる。あの距離で出来ることなんて……

みさきが通過する寸前。風翔の手が自らの足に触れる。足元にメンブレンが集まる。そして、それを蹴って自らを加速させた。エアキックターンの応用。停止状態から一気に加速したのだ。ゼロ加速の速いエンゲイジで今の動き。あっという間にみさきの背後に現れた。しかし、背中をタッチ出来る距離にはない。もう一度エアキックターンをしても、そこにみさきはいないだろう。失敗か……？

次の瞬間、体の向きを滑らかに変えた風翔は、左足に左手を添えた。

バチッという音、そして渦を巻くメンブレン。片足で床を蹴るように、みさきの背中向けて軌道が３０度ほど変化した。
「貰いましたッ！」
「えっ!?　うそっ！」
ポイントフィールド。みさきが2失点し、1対2だ。サードブイを前にして下方向に弾かれたみさき。上昇するが既に遅く――――
「サードブイも、いただきます！」
――1対3。風翔はサードラインに進み、上空で旋回しながら待機。みさきは得点にはならないがサードブイに触れた反動で加速、一気に風翔との距離を詰める。もう一度速度で抜くつもりのようだ。
「今度こそ、行くから！」
ローヨーヨーで加速していく。だけど…
「それは失策じゃないか？　加速の速い相手を抜きたいなら、後で加速出来るハイヨーヨーが……」
その瞬間。みさきの体がブレる。みさきが動く！

風翔はみさきの頭を押さえるべく、下へと動く。しかし、みさきは更にその下、海面ギリギリまで降りていた。
海面近くはポジション的に弱い。押さえつけられると身動きが取れなくなるのだ。みさきには何か考えがあるのか……？
当然、風翔はそこを抑えようと急降下。一気に速度を乗せる。そして手が届くかと言う距離で、みさきはエアキックターンの予備動作を見せた。
だが、加速に勝る敵に対してのエアキックターンはほぼ無意味だ。まして一度は見せた技。みさきもそれは分かっているはずだ。
「……ッ！」
メンブレンが収束する。その瞬間、水しぶきが上がる。反重力に押し下げられて、水面が叩かれたのだ。スイシーダの応用とも言える。
「なっ……」
前が見えない。みさきは後方へと飛んでいた。そして更にエアキックターン。上方を取った！　そして航空機のようにぐるりと旋

回し、垂直に急降下！

水しぶきが金色に輝く。みさきのポイント。２対３。

「よしっ！」

しかし、そこで試合は終了。２対３で風翔の勝利となったのだった。

「ふぃー……すごいね、あんな動き」

「あぁ、俺も初めて見たよ、あんなトリッキーな……」

メンブレン操作に長けるのだろう。特に途中に見せた片手でのエアキックターン。どちらかというとアンジェリック・ヘイローに近い性質のものだが、それをいとも簡単にやってみせた。

「ふー……ありがとうございました……」

風翔も疲れているようだった。流石にあんな動きをしたのだから当然か。

「お疲れ様。凄かったよ」

「いえ、何とか勝ちましたけど……」

「何とか、なんて試合じゃなかったよ。最後咄嗟に閃かなかったら、もっと簡単に負けてた」

「そうだ。さっきの片手でのエアキックターン……あれは？」

本人に聞くのが一番早い。俺も理解して、戦術に生かせれば御の字なのだ。

「あぁ、エアキックターン２の事ですね。片手片足のメンブレンを移動させて、片足でエアキックターンをするんです。絶対量が少ないので角度と速度はつきませんが、少し加速しながらゆるい角度で旋回できるんです」

なんて安直なネーミングだ、と思うが、ネーミングはさておいても非常に有用な技に思えた。ドッグファイトにおいて加速しながら旋

回出来るというのは非常に有利。戦術に組み込んでみようかな。

「じゃあ、休憩後に明日香との試合をしよう。疲れが抜けたら言ってくれ」

「はい、日向さん」

「……そうだ。ウチの部活では、互いに名前で呼び合うことになってるんだ。キミのこと、風翔って呼んでもいいか？」

彼女は少し迷ったような表情を見せた。嫌なのだろうか。

「はい。大丈夫です、晶也さん」

彼女の笑顔に、少々たじろぐ。そしてそれをみさきと真白に弄られるのだった。

「風翔ちゃん、強いんですね」

「ははは……そんな事。それに」

「それに？」

「……今の私は全力じゃないです」

明日香さんが驚きの顔を見せる。それも当然。私でもさっきの試合は上出来だと思えた。それよりも上があると言ったのだから。

「でも、明日香さんに全力を見せていいかも、少し迷ってます」

「是非！　是非全力できてくださいっ！」

頼み込む――というよりは強く要求しているというのが正しいであろう。その眩く輝く笑顔に、私は少し嘆息を吐いた後に

「……分かりました。でも、少し痛いですよ？」

「痛い……？」

意味がわからない、といった顔で明日香さんが言う。私はその顔を見なかったことにして。

「そろそろ始めましょう」

「…うん！」

明日香と風翔がスタートラインに並ぶ。俺はそれを砂浜から見ていた。

『本気で来るって言ってました。う～っ、楽しみです！』

試合前、本当に楽しげに言う明日香。だけど、俺は心の奥で何かが引っかかる感じがしていた。

「本気……あれは本気じゃないのか」

あれほどのドッグファイターはなかなかにいない。ファイターとしては超上級プレイヤーに含まれるみさきを、まるで弄ぶかのように勝利したのに、それが本気ではないとは、どういうことなのだろうか。

もしかして、全く違うプレイングを隠していたのだろうか。いずれにせよ、明日香が非常に苦戦しそうであることは言うまでもなかった。

「セット！」

真白の可愛らしい声が、インカムを通して聞こえてくる。

「「……」」

二人は沈黙している。息遣いすらも聞こえない、高い次元の集中に入っているのだ。

「ぷおおおおおん！」

気の抜けるホイッスルの真似事を合図に、二人は飛び出す。風翔の本気に答えるつもりなのだろう、アンジェリック・ヘイローの応用である超加速を使いながらセカンドブイを目指す明日香。定石通り風翔もショートカットした。

セカンドラインに到着する頃、明日香はセカンドブイにタッチ。1対0。

反動を使って加速した明日香は、優位であるスピードを活かして、フェイントで振り切るモーションを見せる。体がブレる。

視線と体を使ったフェイント。それに引っかかった風翔は体を動

かす。その瞬間に明日香はメンブレンを蹴り上げて加速し、風翔が居た場所を通過しようとする。

バチィッ！　電撃のようなエフェクトと共に、明日香の体が止められる。風翔もその衝撃で回転扉のようにぐるりとその場で回転していた。

防いだ……やはりあの反射神経は目を見張るものがある。みさきと同等かそれ以上。そして回転しながらも、初戦で見せたエアキックターンの応用で、明日香に向かって突撃。

明日香のグラシュ、飛燕四型は良くも悪くもクセがないオールラウンダー用。初速では圧倒的に劣っていた。背中を取られる！

そう思ったが、風翔はそのまま明日香に体当たりした。その動きを予想していなかった明日香は、姿勢を大きく崩しながら後方へと吹き飛ばされる。

「……っ!?」

明日香が苦悶の表情を浮かべる。自らが置かれている状況に歯噛みしているのだ。オールラウンダーとはいえ、相手は純度１００％オーバーのファイター。ドッグファイトでは、スピーダーがファイターを相手するレベルの不利を背負っているようなものだ。

「……ごめんね！」

風翔はグラシュの特性を活かして明日香の下をくぐった。明日香も持ち前の反射神経と天然っぷりで体をひねらせ背中を隠す。だが、風翔にとってそんなことはどうでも良かったのだ。

風翔が両手を重ねる。そして、その腕を天高く掲げるのが見えた。

「あのモーション……！」

見覚えがあった。故に、俺は本能的に明日香に叫んでいた。

「避けろッ！」

インカムを通さない俺の声など聞こえるはずもない。まるで落雷の予兆のように風翔の頭上に現れるメンブレンの壁。そして、撃ち出されるかのごとく高速で風翔の体が前方に回転する。

「ぐぅ……ッ！」

明日香の苦しそうな声がインカムを通して聞こえた。そして次の瞬間には、明日香は『セカンドライン上から』水面に叩きつけられていた。

「『スタースプラッシュ』……！」

腕のメンブレンを移動させ、超高速で体を前転させる。その勢いと全体重を乗せた鉄拳を以て敵を水面に叩きつける、スイシーダの発展技。そしてこれを使う選手は、俺の知る限り一人だ。

「……成る程な。思い出したぞ」

昨年の地区大会。瀬渡内地区で波乱が起きた。初戦から全試合を強引な手法で勝ち抜いてきた少女。先ほどのスタースプラッシュやスイシーダ、様々なルールの盲点をついたラフプレー。反則とは言えないが、到底綺麗な勝ち方とは言えない戦法。

「晶也、あれ……」

みさきもその不穏な空気に気づいたのだろう。少し不安な表情を見せた。

「『瀬渡の撃墜王』か…　どこかで見た顔だと思った」

最初は違和感を感じなかった。しかし、本気を出すと言ったこの試合から、まるで獲物を狩る肉食獣のような眼をするようになり、その姿にどこか既視感を抱いていたのだ。それが最初に感じていた違和感の正体であることに、今気がついた。

「すごい……えげつないね。痛そう……」

反重力で守られているとは言え、何かに叩きつけられるのは痛い。水面に高速で叩きつけられた明日香がどれほどの痛みを感じているのかは理解できた。

さらに、そこに風翔は追い打ちをかけようと全速で降下する。姿勢を立て直した明日香は、魔の手から逃れようとセカンドブイ方向へと飛ぶ。それを見た風翔は降下をやめて緩やかな弧を描き上昇。サードブイを目指す。

明日香は追うことはせず、セカンドブイを蹴って加速、ショートカットでサードラインを目指す。風翔がサードブイに触れて1対1。

今度は明日香がサードライン上で旋回しながら風翔を待ち構えた。
そこに風翔は猛然と突撃していく。先ほどと同じ流れに持ち込まれれば風翔の思うツボ。明日香がどう対応するか。
すると明日香は、自らの得意とするフェイント技、ペンタグラム・フォースを繰り出した。風翔はそれに囚われ、身動きがとれなくなる。明日香がどこから攻撃してくるかを見切るまでは動けない。

明日香が、エアキックターンで動く。左側面方向からだ。それに対して風翔は、右肘を左手で触れるように動かした。メンブレンの操作だ。右肘に大量に流れるメンブレン。壁ができたところで、それを叩くように右手が動く。
「……てえツ！」
先ほどの穏やかな表情からは想像もつかない暴力的な声と共に、メンブレンの反発で風翔の腕が振るわれる。みぞおちを殴るように振るわれた風翔の拳だったが、それは空を切った。
S字に鋭角を描いてそれを回避した明日香が、風翔の背中に触れる直前、風翔は体を丸めてエアキックターンの応用で縦に回転した。腹を晒す風翔に対し、明日香の手が触れる。
バチィッという、反重力同士が反発する音。それと同時に風翔はエアキックターンでその場を離れた。反重力の反発力、明日香との接触の衝撃、そしてエアキックターンの後押しで、風翔は爆発的に加速する。
「……あっ！」
まずい、といった表情を浮かべる明日香。まさかそこまで吹っ飛ぶとは思わなかったのだろう。風翔はフォースブイ方面へと飛ばされていた。それもうんと速くだ。
しかし、もう取り返せる距離には無かった。それなりに追いつきはしたが、フォースブイは風翔が取った。2対1。これほどドッグファイトをしているのに、何故かドッグファイトでは点差が開かない試合展開だった。
フォースブイに風翔が触れた瞬間。風翔は先ほど明日香を蹴って

フォースブイに向かったのと同じように、ブイの反発力とエアキックターンで明日香の方向へと加速した。
「……えいっ！」
「きゃっ……！」
まるで戯れる子供のような声だが、やっていることはえげつない。サードラインを逆走するように飛ばされた明日香を尻目に、風翔が反動を活かして再びフォースライン方面へ。フォースブイを蹴って加速していく。
「い、今の！　反則じゃないの!?」
「……いや、風翔はフォースラインに入ってなかった。多分、国際規格の審判なら――反則は、取らないな」
今のは、風翔が得意としていたエアキックターンの応用技、『ダブルキックターン』。ブイだけでなく通常のエアキックターンでも使える技術で、相手を逆方向に飛ばしながら自分はブイに向かう、ブイで得点を狙う際の技。
先ほどのドッグファイトも、今のダブルキックターンもそうだが、風翔はタイミングコントロールが上手いようだ。反重力が反発する瞬間と、メンブレンが反発する瞬間を重ねるのは容易いことではない。しかしそれが出来れば、今のように複雑かつ超高速の連撃を叩き込む事も可能なのだ。
「……でも、褒められたスタイルじゃない」
勝ちを貪欲に求め、相手を叩き潰すかのように舞う。相手によってはトラウマを背負うことにもなるだろう。それはかつて俺が否定したもので、今後もきっと、認めることはないであろうもの。
風翔は味方だ。共に戦う仲間になる少女だ。だったら……この戦い方は、俺は認められない。
真白の合図で試合が終わる頃、二人の点差は3点に開いていた。
「……ふぅ」

風翔は先ほどまでの狩人のような目は何処へやら、初対面の際の大人しい顔に戻っていた。
「お疲れ様。どこかで見たスタイルだと思ったら、『撃墜王』だったんだね」
「？　誰のことです？」
とぼけているのか本当に知らないのか。
「風翔だよ。『瀬渡の撃墜王』って呼ばれてるの、知らなかった？」
「へぇ……初耳です。多分、私のプレイスタイルのせいですね」
風翔は、瀬渡内地区予選において、最初に繰り出した『スタースプラッシュ』を毎試合使っていた。ライン上からでもスイシーダを食らわされる。防ぎようのない絶対的な攻撃。試合相手は誰もが戦慄したことだろう。
「……それなんだが」
「？」
「このスタイル、封印してもらおうと思う。少なくとも、俺が良いと言うまでは」
その俺の言葉に、風翔は異論があると主張するようにこちらを見ていた。睨むでもなければ笑顔でもない。だけどどことなくプレッシャーを感じる顔で。
「どうしてですか？」
「どうもこうも。今の風翔のスタイルは確かに強いよ。だけど、俺は『楽しいＦＣ』をして欲しい。今の風翔のプレイングは、相手にトラウマを植え付ける『恐怖』でしかない」
絶対的な王者。試合において相手を常に圧倒し、暴力的なほどの力を以てねじ伏せる。それは確かに勝利に一番近い方法かもしれない。だけど、だけど・・・
「結局、俺のワガママなんだ。そういう人、何人も見てきてるから……だからこそ、封印して欲しい」
「……晶也さんの言い分、私にはわかりません。でも――」
先ほどの恐怖を感じる顔は笑顔になっていた。その笑顔には裏も表もない。

「――コーチの言うことなら、信じます」
どうやら割り切ってくれたようだ。彼女はこんなプレイをしなくても、四島でもトップランカーになれる実力を持っている。その銀色の翼で、綺麗に戦い、勝ってほしいと、そう思った。

「いやぁ～、強いね、風翔ちゃん」
「明日香さん。ごめんね、痛かったでしょ」
私のプレイスタイルは相手を肉体的に傷つけることもある。怪我をさせたことは無かったけど、その瞬間はかなり痛いはずだ。
「うん、結構きたよ。でも凄かったです！　あんなプレイ初めて見ました！」
「あはは、ありがと。だけど、あのスタイルはもう見せないんじゃないかな」
「？　……どうしてですか？」
「晶也さんが、封印しろって。相手を傷つけるのは良くないから……って」
正直、私は納得できていなかった。勝ちたいから使うのではない。強くありたいから使ってきたスタイルだったのだ。勝ち負けよりも、自らを高いレベルに持っていくための手段だった。
それに、ルールに違反もしていなければ相手を怪我させてもいない。そのための安全規定なのであって、それを守っているうちは相手を直に傷つけることもないはずだ。
「まぁ、晶也さんらしいですね。晶也さんのモットーは楽しいＦＣですから」
「明日香さんは……楽しくなかった？」
「私は楽しかったです！　でも、私は新しい発見なら何でも楽しく思えちゃうので……」
参考にならないんだよ、と笑う。その姿勢はいいことだ。でも私に

は真似できそうにもない。

「じゃあ、帰りましょう！」

「……うん」

とにかく、これから頑張る必要がありそうだ。今までのスタイルを変えるとなると、新たな長所を探さなきゃいけない。それには少々時間がかかるはずだから。

その日の夜。私は一人で空を飛んでいた。

ただの空中遊泳じゃない。競技用グラシュを履いて、深夜の自主練習だ。

今までのスタイルを変えるのは簡単じゃない。とにかくまずは自分の得意スタイルを見極めようと、何度も試行錯誤を繰り返していたところだ。

自分からスタースプラッシュやダブルキックターンの要素を除くと、不思議なほどに凡才な少女になっていた。エアキックターンとエアキックターン2くらいしか特技はなく、グラシュの特性から一度抜かれると勝負権を失う、とてつもなく脆いファイター。

「……うーん」

違う。これじゃない。

空を蹴る足が妙に重たく感じる。

あれほど自信にあふれていた心に、どす黒い何かが住み着いたようだ。

「……ーぃ」

何度宙を蹴っても戻ってこない感覚。何が違うのだろうか。自分の本能ですら、それを理解できていない。

「……おーい！」

ビクンと体が跳ねた。声の主は、私の知っている男性。
「晶也さん。どうしてここに？」
降下しながら問う。
「音と光で気づいた。だいぶ頑張ってるみたいだな」
「……何だか、掴んでいたものを見失った気分で。飛んでいないと不安になったんですよ」
地面に降りる。ずしりと重たくなる体が、今の気分と重なる。
「それは、多分安心感だよ。あのプレイスタイルが心の拠り所になってたんだと思う」
彼の目は遠くを見るような目になっていた。きっと、私に重なる何かを知っているんだろう。
「でも、いずれ掴めるよ。そんなに遠い未来じゃないと思う」
「……」
私は、変化が怖いのか。今手にしている強みを手放すのが怖いのか。
……なら、その恐怖を乗り越えてこそ、本当に強くなれるんじゃないのか。
「……私」
「ん？」
ここで決意を示す。後戻りはしない。きっと、きっと掴んでみせると。
「……私、頑張ります！　違うスタイルで、全国で戦える選手になりますッ！」
「……おう」
晶也さんはそれ以上何も言わなかった。静かに踵を返した彼に背を向けて、再び空へ躍った。

負けたくない、負けられない
久奈浜学院

「もっと出せるぞー！」
「は、はいぃっ」
　冬休み最後の日。久奈浜学院ＦＣ部の練習に通い詰める私は、晶也さんの過激なしごきを食らっていた。
「エンゲイジの最高速は確かに遅いけど、まだ出るだろ！」
「が、がんばりまふ……！」
　今やっているのは、最高速トライアル。とにかく全力で、全速で。出せる限りの速度を出す練習で、これをすることで飛行姿勢の調整や高速時の姿勢制御、またグラシュのセッティングなども研究できる。
　しかしこの練習、生粋のファイターにはかなり辛い。最高速を出すための筋肉は派手に動き回るための筋肉とは違う部位で、いつも使わない筋肉に思い切り力を入れるためすぐにヘタってくる。
　風を切る音がいつもと全然違う。勝負となるとドッグファイトしか出来ない生粋のファイターである私は、こんな速度で飛ぶのはグラシュを変えて以来初めてだった。
「コントレイルがブレてる！　もっと真っ直ぐ！」
「ひえぇ……っ」
　純白のコントレイルが、まるで波形のように縦に微動しながら空に引かれて行く。

「晶也、鬼だね」
「鬼ですね」
「風翔のためなんだよ……みさきにだってこんなことしたことあっただろ」
「あったね。あの時ほど晶也が恨めしかったことはないね」

蒼い空にすっと伸びるコントレイル。飛行機雲のように真っ白で、それでいて太く逞しく、強そうな印象を受けた。
「でも、遅いですよね」
「それは真白がスピーダーなのもあるだろうな。風翔は生粋のファイター、それもかなり濃い。最高速は異次元の遅さだよ」
扱いにくいファイター用グラシュで、最高速でここまでまっすぐなコントレイルを引いているのは相当にすごいことだ。だが、やはりファイターだけあって遅い。やはり速度合戦は相手が誰でも不可能だろう。
「よし、戻ってきていいぞ」
「ふぇ……もう無理ぃ……」
ふらふらと落ちるように帰ってくる風翔。その顔は疲れきっていた。
「風翔ちゃんすごいです。あれだけ飛んでも帰って来れるんですね」
「……そうだな。俺も驚いた」
「あたしだったらあそこで浮いてるにゃー」
ファイターにとって最高速トライアルは苦痛この上ないはずだ。普段使わない筋肉を使って、普段しないことをするのだ。これだけの時間、最高速で飛び続けても戻ってくるだけのスタミナがあるのは驚くべきことだ。
着地と同時に足から力が抜けたのか、砂の上に倒れこむ風翔。汗でぐっしょりの肌に砂が張り付くのも気に止めず、ただ心地よく冷えた砂に体を預けていた。
「お疲れ様。はい、お水だよー」
「あ、ありがとうございまふ……」
窓果から冷えた水を受け取り、一気に飲み干す。そうするとまたぐったりと倒れ込んでしまった。
「お疲れ。どうだった？　全速で飛んで」
「やっぱり、ファイターにはきついですね……でも、速度を出すのは、嫌いじゃないです」
風翔の飛行姿勢は綺麗だった。スピーダーのそれと遜色無いし、実

際スピーダー用グラシュを履かせればかなりの速度が出るのだろう。
「スピーダーやればいいんですよ。きっと楽しいですよ」
久奈浜学院ＦＣ部で唯一のスピーダーである真白は、風翔をスピーダー仲間に引き込もうとしている。実際ひとりで練習するのはあまり楽しくないらしく、その気持ちは俺も理解していた。
「私も元スピーダーだったんです。でも勝ち抜くためにファイターに転向したんですよ」
「そっか……じゃあファイターはやめませんよね」
勝ち抜くため。彼女はその温和な表情とは裏腹に、勝利への執着が非常に強い。その結果があの力でねじ伏せるラフなプレーだ。スピーダーからファイターに転向した理由も、その勝利への執着だ。
「はい。私には強くある必要があるんです」
風翔の見せる乾いた笑顔。その笑顔を潤ったものにするために、俺は再びコーチになる必要がありそうだ。

新品の布団の匂いの中で目が覚める。暖かな日差しがカーテンの隙間から額に当たり、心地よい目覚めを迎えた。
「ん……ぅーっ」
伸びをすると、地元よりも少し暖かく感じる空気と、新居の少し埃っぽい空気が混じりあった生ぬるい気温を感じる。時計を見ると予定の時刻よりも少し早く、それを思うとこの暖かな日差しが憎い。
「起きなきゃ……いて……いてて……」
バキバキに筋肉痛を患った体を動かしてベッドから立ち上がる。内股のあたりの言い表せない部分と、脇腹あたりが異常に痛む。普段使わない部分だけに庇い方も分からず、思わずよろける。
「まさか、昌也さんがあんな鬼だとは……」
結局あの最高速トライアルの後も地上で空中で走らされまくって

へとへと。今日から転入だってのに、ヘコヘコよちよちと歩いてたんじゃ笑われてしまう。

「んっ……いたたっ……」

体をひねったり、筋を伸ばしたりして少しでも体をほぐす。痛みに慣れておけば、少なくともまともに歩けないということはないはずだ。

ともかく支度をせねば。この体の事を考えれば予定より早く起きたのは良かったかもしれない。少しは動くようになった体で部屋を出て階段を降りた。

ケトルに水を入れてスイッチを入れ、洗面台へ向かう。軽く身支度を整えているうちにお湯が沸く。スティックタイプのコーヒーを淹れて、食パンをトースターに突っ込む。

食パンが焼けるのをコーヒーを飲みながら待つ。安いコーヒーの安っぽい匂いでもしっかりとリラックス効果があり、寝起きの頭がしゃきっと切り替わっていく。

「へぇ……日本選手も頑張ってんだ」

ニュースサイトで海外ＦＣの事を調べていたらトースターが間抜けな音をたてる。黄金に焼けたパンをかじりながら事前に用意しておいた荷物の確認をする。初日は授業が無いため、提出書類と筆記用具類、それにエナメルバッグに詰めてあるのはＦＣ用の道具一式だ。

「スーツも入れたし、グラシュも入れた……タオル、着替え……よし、いいね」

私のパーソナルカラーとも言えるブルーのエナメルバッグの口を閉める。その頃にはパンも食べ終わって、あとは身支度を済ませたら出発するだけだ。

少しばかり特殊な構造の制服を着て、歯を磨いて顔を洗って。

そして仕上げに、思い入れのある犬っぽいマスコット付きのヘアゴムで、右のもみあげを括る。これが私の昔からのヘアスタイルだ。この水色の髪は人並み以上に綺麗な自信があり、密かな自慢でもある。

カーディガンを着て荷物を持ち、家を出るとそこには桃色の少女がいた。

「あ、明日香さん。おはよー」
「おはようございます、風翔ちゃん」
　透き通る桃色の髪を揺らして弾けるような笑顔で笑う明日香さん。
私は少し飲まれそうになっていた。何というのだろうか。カリスマ性？いや違う。もっと親近感が湧くような。
「今日から学校ですね！　みんな優しいですから、安心してくださいっ」
「うん、そこは心配してないんですけどね。やっぱり3学期からとなると、馴染むのも難しそうだなって」
「それこそ大丈夫ですよ。まぁクラス次第ではあるんですけど」
　話ながら歩き出す。とはいえ歩くのは停留所まででさほど距離はなく、早足で歩けば5分とかからないのだが。
　久奈島は島だけあって海から吹き上げる少し湿った風が心地よい。日差しも春らしく熱すぎず、散歩気分で歩くにはちょうど良かった。
「ん、あれ……」
「あ、昌也さんですね。昌也さーん！」
　停留所の近くで、電柱に背を預けてスマートフォンを弄っている青年。少し硬そうな黒髪は健康的なショート、薄緑の瞳は力強くキリッとしている。昔何度も読み返したＦＣの雑誌で見た少年よりも男らしく、たくましく成長している。
　――と、昔の彼に一度も会ったことのない私が分析するのもおかしい話か。
「おはようございます、昌也さん」
「おはよう明日香。それに風翔も」
「待っててくれたんですね」
「あぁ。明日香とはよく一緒に行ってるんだ」
　遠まわしについでだと言われたようで、少し複雑だなぁ。だけど、待ってくれていることに不満は一切ないから良し。
「ともかく行こうか。風翔は用事とかあるんじゃないのか？」
「始業よりも少しだけ早く職員室に来るように言われました。でもそ

れだけですよ」
　転入初日とあってもっとバタバタすると思っていたのだけど、案外普通な感じでむしろ拍子抜けだった。かえって特別感がなくて、廣島の学校に今までどおり通っているかのような錯覚をしそうなほどに。
「ＦＬＹっと」
　起動ワードで昌也さんの学校指定のグラシュが起動する。薄青色のエフェクトが発振されると、ふわりと宙に踊った。
　私も行こう。緊張はするけど、大丈夫。皆がいるから、ひとりじゃない。
「ＦＬＹっ！」

　扉をノックして、中から返事が返ってきたのを聞いて開く。引違い戸ががらがらと音を立てて開かれると、職員室特有の強いコーヒーの香り。
「あ、道真ちゃん。こっちだよこっち」
　手招きする女性。小柄だが体つきはよく、ヒップが大きめの安産型。おっとりとした表情はどこか小動物を思わせ、低い位置で束ねられたブラウンのロングヘアは太く滑らか。
　前任の顧問を受け継ぐ形で久奈浜学院ＦＣ部の顧問を担当しているらしい、汐留（しおどめ）　順香（よりか）先生。元々非常勤だったらしく、今は非常なので常勤に格上げだと言っていた覚えがある。
「改めて、転入おめでとう。歓迎するよ」
　髪色と同じ、深いキャラメル色の瞳を細めて先生は笑顔を見せる。
「ありがとうございます。よろしくお願いします」
「うん、よろしく。それで本題なんだけどね、道真ちゃんは私のクラスで受け持つことになったの。だから私から必要な事を話すんだけど」
　自分の机の引き出しを開けて、クリアファイルに挟まれた数枚のプリントを私に手渡す。ちらりと読んでみると、長期休み前にもらう

『～休みのしおり』みたいなもので、大雑把に校則が示されていた。
「校則に関しては、空いた時間とか家でそれを読んでね。で、ここからはプリントに書いてないことだからよく聞いておいて」
　先生は机の上に置かれていた手帳を手に取り、付箋の貼られているページを開く。
「3学期はすぐに学年末テストがあるんだけど、道真ちゃんは学年末だけ特別に赤点のボーダーラインが１０点だけ下がるの。他の子に言うと嫉妬しちゃうからナイショね？」
　しーっ、と人差し指を立ててはにかむ。少女的な顔つきの人だが、こういう時には年相応のお姉さんっぽい魅力が溢れ出る。やはり人生経験は一足飛びに手に入れられるものではないなぁ。
「まぁ道真ちゃんは入学テストの結果からして、油断せずにしっかり授業を聞いてれば大丈夫だよ」
「そうですか。なら安心しました」
「まぁこんなのはオマケに過ぎなくて。私が本当に話したいのはＦＣの事。風翔ちゃん、プレイスタイル変えるんだって？」
　ドキリと心臓が跳ねる。この人は、いつも笑顔なだけに表情から心が読めない。
「あ、良いとか悪いとかじゃなくてね。私は風翔ちゃんの前のプレイスタイルも知ってるし、それでも良いと思ってる。風翔ちゃんは納得して変えるの？」
「納得……そうですね、変える理由に納得はしてないですけど、変えることには納得してます」
「そっか。強要されてないなら良いの。頑張ってね」
「はい……」
「じゃあ行こっか。ホームルーム始まるよ」
　納得。納得したかと言われればしていない。それでも私は決めたからやるんだ。

教室の前に立つ。ドアの向こうで先生がホームルームを進めているのが小さな窓を通して見える。そして一瞬こちらに目配せして微笑んでみせた。そろそろということだろうか？

ドアの向こうでこんなにガチガチに緊張したクラスメイトが出番を待っているなんて誰も思っていないだろう。どんな顔をされるだろう。驚かれるかな？　笑われるかな？

明日香さんは大丈夫だと言っていた。だからきっと大丈夫だ。そう言い聞かせて深呼吸をしたところで先生が手招きをした。

ドアを開いて一歩教室に踏み込む。日差しに温められた空気が肌に張り付く感触。きっとうっすらと冷や汗をかいているせいだ。なんて冷静に分析をしていたら少し落ち着いてきて。

「3学期から転入してきた転校生です。自己紹介を」

「道真風翔です。風に翔けると書いてふうか、って読みます。趣味はフライングサーカスです。よろしくお願いしますっ」

頭を下げて、拍手をもらったところで上げた。興味深そうにこちらを見るクラスメイトの中に見慣れたメンバーがいることに気が付く。

青い瞳で笑顔を見せるのは明日香さんだ。その隣でぐったりしているのはみさきさん。更にはマネージャーの窓果さん、そして昌也さんも一緒だ。

――なるほど。これが明日香さんが大丈夫と言う所以か……

「一番後ろの席でお願いね。今日からよろしく」

そう言ってウインクする先生に促され、私は席に着いた。

「――まさかみんな同じクラスだとは」

「なんだか、そうなる予感はしてたんですよね」

「あぁ。皆でそうなりそうな予感がするな、って話をしてたんだ」

教室の後ろの方で集まって話す。まさかＦＣ部の面々がここに勢ぞろいするなんて思ってもみず――真白さんは仕方ないとして―

――個人的にはかなり嬉しい。知った人が多ければ多いほどクラスにもなじみやすいはずだ。
「今日から部活できるんですか？」
「うん、この前先生に挨拶に行った時に入部届けは出してたので」
「やった！　これでいっぱい一緒に飛べますねっ」
私の手を取って嬉しそうにぴょんぴょん跳ねる明日香さん。対照的に机でぐったりとしているのはみさきさんだった。
「あの……みさきさん、大丈夫なんですか？」
「あー、大丈夫だよ。あの子は朝が異常に弱いだけだから……」
窓果さんが苦笑いしながら言う。私が会うのはいつもお昼だから知らなかったけど、そんな一面があったとは。
「――ふふっ」
「？　どうかしましたか？」
「いや、何でもないですよ。ただ、これから楽しくなりそうだなって」
不安に思っていた久奈島での生活。学校での生活。どちらも順調で、楽しくなりそうな予感がしていた。

変化

光の射す部室。埃っぽさこそあれど清潔で、最低限の体裁を保っていた。その最低限というのも、例えばシートの破れだとか床のきしみだとか、最初からあった不具合のようだ。

そんな廃バスを利用した部室で、一人ペンを片手に思い悩む。しかし何を書くわけでもなく、ただ内張りの剥がれて所々断熱材の覗く天井を仰ぎながら思考していた。

「……うーん」

水色の髪が揺れる。手元のノートには何も書かれておらず、無益な時間が過ぎている事を証明していた。

「どうしたの？」

「わっ!?」

前部の乗降ドアから顔を覗かせているのは汐留先生。低いポニーテールにまとめたキャラメル色の髪がだらりと重力に引かれている。

「あ、ごめんね驚かせて。なんだか思いつめてるみたいだったから」

「思いつめるってほどでも……ちょっと考え事ですよ」

そう返すと、先生は何かを企むような顔を見せた。まるでいたずらを考える小学生のようにあどけない笑顔だ。

「……プレイスタイル、定まんないか」

「――分かりますか」

「分かるよ。これでも顧問だもん」

その幼い表情の奥には、どこか大人の余裕を感じる。抜けているように見えるゆるい雰囲気の先生だが、この辺かなり目ざといようだ。

「そうですね。ぶつかりに行く生粋のファイターなので、優位が取れないと、ちょっと……って」

「そっかぁ……うーん」

再び何かを企むような顔。そして少し経って。

「練習試合、組んでみよっか」

「――え？」

「――――で、唐突に練習試合が決まったと」
「そうです。何か、ごめんなさい」
「いや、試合の機会が増えるのはいいことだ」
　少し経った部室で、昌也さんと二人。昌也さんは衝立の向こうでフライングスーツに着替えており、時折絹すれの音が耳に入る。
「それに、俺もそろそろ先生に話を通そうと思ってたんだ。ちょうど良かったよ」
「でも、高藤ってかなりの強豪校ですよね……どうしてそんなところと練習試合が組めるんですか？」
　今度の練習試合の相手は、高藤学園福留島分校。全国大会の常連で、四島はおろか全国的にも強豪に含まれる高校だ。確か前年度の全国優勝も高藤から出ていたはず。
　対する久奈浜学院は、そうは言っても小規模に含まれる学校だろう。ＦＣ部も強さこそ全国レベルであれど、規模は……見ての通りだ。
「高藤とウチは、結構密接なつながりがあるんだ。練習試合とか合同練習も何回かしてる」
「へぇ、そうなんですね……だから二つ返事で了承が返ってきたんだ」
　先ほど私に練習試合を組むと言ってから、先生はその場で高藤に電話をかけていた。そしてその場で了承を得たのだった。
「……高藤は今、切り替わりの時なんだ。今までは、三年生の部長が引っ張っていた。こう言うのもなんだけど、元部長と今の部員たちには余りにも技術の開きがある。きっと皆経験が欲しいんだと思うよ」
　衝立の影から、フライングスーツに着替えた昌也さんが出てくる。白を基調に黒、緑を配色した少年的な色使いで、同じく少年的なルックスの昌也さんによく似合う。

「ともかく、今は練習しよう。高藤相手に情けない試合はしたくないし」
「……そうですね。今から楽しみです」
膝にかけていたブランケットを畳み、部室を後にする。

試合形式の練習。空に描かれるのは白と水色のコントレイル。鋭角に素早く駆け回る白い軌跡に対し、楕円を描くように旋回しているのは水色の軌跡だ。
「そこっ！」
「くぅ――――っ」
進行方向に凄まじい速度で現れた風翔に対し、真白は旋回しながらの上昇で回避。それを追って風翔はもう一度加速を開始する。
真白も、成長スピードこそ遅いものの、確実に強くなってきているのが分かる。速度を殺さない立ち回り、それがスピーダーに最も求められる技術。直感的に戦うファイターよりもさらに戦術の組立が重要になる。
再び同じパターンで風翔が行先に立ちはだかる。真白は上方向にフェイントを入れ、下方向へ。体の構造上、下方向は防ぎにくい。上や左右は手を伸ばせるが、下に手は伸びない。
しかし風翔はそれを読み切っていた。足元で光を瞬かせメンブレンを操作。宙返りのように方向転換し、真白の背中を狙う。
真白の背中に風翔の手が触れる。ポイントフィールドが発生し、風翔にポイントが入る。
「でも、これなら……！」
真白は風翔にプッシュされた勢いを利用してローヨーヨーに移行。風翔の呪縛から抜け出した。対する風翔はそれを見て即座に次のラインに移動する。

真白がブイに触れる。これで2対1。真白がリード。
「よし、そこまで。降りてきてくれ」
「分かりました」
「これからってところなのに～」
二人が砂浜に降りてくる。冬だというのに汗がにじんでいるのは、二人がそれだけ本気だったという事だろう。
「風翔とやってみてどうだった？何か得たものとか」
「そうですね……すごい、怖かったです。こっちは小回りが効きませんから、捕まったら終わりだと思って必死に逃げたんですけど……」
スピーダーは旋回に弱い。スピードが出ていれば出ているほど曲がらないのは車と同じで、相手の動きを遠くの時点で察知する能力が求められる。
今日の真白はかなり冴えていて、その点でいつもよりも高いレベルにあった。今なら他の学校のレギュラーメンバーと戦ってもそれなりにやれるだろう。
「風翔は？何か見えたものはあったか？」
「いえ……相手を足止めできないと今回みたいにリードされて終わっちゃうんですよね……」
対するファイターは速度が遅い。毎回セカンドブイの一点を与えた状態からスタートするファイターにとっては、その後のライン上で二点以上取れないと厳しくなる。そのままズルズルと一点の差を引きずることになるからだ。
「何とか相手を捕まえる方法を考えないとな……」
「いつもみたいに、一度手を触れれば何とかなるんじゃないんですか？」
「上手いスピーダーはそれを見切ってくる。押された反動でブイに飛んだりするしな」
「うーん……難しいですね、ファイターって」
明日香が唸る。スピーダーは一度パターンに入れてしまえば何度もポイントを重ねることが出来る。対照的にファイターはそれを崩す何かを持っている必要があるのだ。

「みさきは何か、心がけてることみたいなのはあるか？」
「んー……スピーダー相手にはともかく軌道を読んで先回りか、相手の方に突っ込んでいくかのどっちかだから……特にないかな。直感？」
　直感派のみさきはそのへんを野生の勘で嗅ぎつけるようだ。やはり天才肌は人に教えるのが下手なのだろう。
「……ここは考えても仕方ないな。今日のところは終わりにするか」
「疲れたー！甘いもの食べたーい！」
「いいですね。甘いもの食べて帰りましょうよ」
「あ、私も行きます！」
「じゃあ私も」
　思いつめたら気分転換。そんなこんなで、ファミレスに行く予定が出来たのだった。

「ＦＬＹっ」
　停留所から空へ踊る。何度、どこで飛んでもこの浮かび上がる瞬間の高揚感は堪らない。すっかり暗くなってきた空に飛び上がると、海の彼方、水平線に赤い夕日が見える。
「綺麗ですね～」
「そうだね、すごい綺麗……」
　故郷、廣島は瀬戸内だったから、海こそあれど水平線を見る機会はなかった。橙に染め上げられた水平線は、コントレイルのように真っ直ぐで、水面にじんわりと滲んでいる。
「ほらほら、早く行こうよ～」
「そうだな。行くか」
　ローファー型のグラシュが短く細い軌跡を描く。
「あ、待ってくださいよ～」
　私たちもそれに続く。紺色に染め上げられた空に、白色と桃色のラ

インがすっと引かれる。

「みさきさんのグラシュって、ファイター用のレーヴァテインですよね？どうしてそれを選んだんですか？」

空を飛びながら、ちょっとした疑問を投げかけてみた。インベイド社のレーヴァテインはメジャーでこそあれど、ユーザーの少ないピーキーなモデル。それを選ぶにはそれ相応の理由がありそうだ。

「かっこよかったから」

「……えっ？」

「かっこいいでしょ？レーヴァテイン。だからだよ」

確かに、レーヴァテインはカッコイイ。凹凸が多く、シルエットはかなり大柄でＳＦに登場するロボットのようだ。黒いボディが放つ光は金色。メカらしさを前面に押し出したスタイルは一定の人気を誇る。

「……それだけ、ですか？」

「うん。逆に風翔は何でそれなの？えっと……」

「エンゲイジですね。これはまぁ、紆余曲折がありまして……」

私がエンゲイジを使い始めた理由。それにはちょっと複雑な理由があったりする。

「私の親友――私にＦＣの楽しさを教えてくれた子なんですけど、彼女が使ってたのが同じアブルホールの『ウェアウルフ』ってやつだったんです。それをリスペクトして使い始めたのが次弾の『マーメイド』、ファイターに転向するときに買い換えたのがこの『エンゲイジ』なんですよ」

「へぇ……その親友ちゃんって、強いの？」

「強かった、ですかね。今は知らないです」

そうきっぱりと言うと、みさきさんは何だか釈然としないような顔をした。

「親友って言うからには、今も付き合いがあるのかと思ったんだけど……」

「今は会えない事情があって。いずれまた会うと思いますよ」

今でも会いたいと思っている。だけど今はその時ではなく、約束を違わなければいずれＦＣの舞台で会うことができる。だから今は連絡を取らないようにしているだけなのだ。

「エンゲイジ、かっこいいでしょう？」

「……うん、正直すっごい好み」

あまり好きじゃない話題になってしまったので、多少強引だが話をすり替える。そんなこんなで雑談をしていたら、久奈島の中心街まではすぐだった。

その日の夜。私は一人、夜の海岸に来ていた。グラシュは持たず、普通の靴を履いて。

「ん――っ……風が気持ちいいな」

私は昔から眠れない日に、こうして海を見に来ることが多かった。海が好きというよりはこの湿った風が好きで、鼻腔をつく磯の香りもどことなく心を癒してくれていた。

「……ここちゃん」

かつて親友としてともに空を飛んだ少女。今どこで何をしているのかは分からない。それでも私は友達だと思っているし、これからもそうだと思っている。

しかし、相手がどう思っているのかは分からない。もしかしたら約束のことなんて忘れているかもしれないし、もしかしたら性格がガラッと変わって私の事を何とも思っていないかもしれない。

「それでも……」

私にとっての飛ぶ意味は親友との約束が大部分を占めている。それをふいにされたからといってＦＣをやめはしないと思うが、少なくともモチベーションは著しく落ち込むだろう。

「待っててくれてるかな」

自信がなくなってきた。そもそも私はネガティブな性格で、前を向く理由がないと前を向けない。支えがないと立ち上がれない。そんな人物だ。

「……今は考えても仕方ないか」

だが、今は親友という支えがある。まだ頑張れる。

「うー、寒っ……帰ろ」

なよなよした自分を投げ捨てて、明日からも頑張る決意をするのだった。

その週末。私たち久奈浜学院ＦＣ部は、四島において久奈島と隣り合う島である福留島にやってきていた。

「来ましたねー……何だか久々ですね」

「事実久々だもんね。腕がなるにゃー」

大きな学校施設だ。近代的な作りの校舎と広いグラウンド、向こうに見える砂浜も学校の敷地だろうか。――――高藤学園福留島分校。本土に本校を持つ高校の、分校とは思えない規模の分校だ。

「すごい大きいですね……」

「風翔は初めてだもんな。皆優しいから、緊張しなくていいよ」

「と、言われましても……」

私が元いた高校と比べても倍近い。久奈浜学院もそれなりに大きいが１．５倍はあるだろう。

「ほら、行くよ。いつまでも門の前でガクブルしてられないから」

窓果さんに手を引かれて歩み始める。校門を通り、もう後には退けない。

「……頑張らなきゃ」

久奈浜学院ＦＣ部の部員として、初めての練習試合が始まる。

高藤学園

高藤の大きな正門をくぐると、これまた大きな校舎がそびえ立っている。高藤本校といえば画期的システムを導入するマンモス校として全国的に有名だが、この福留島分校もかなりの大きさ。本校がマンモスなら分校はゾウといったところか。

校舎に囲まれた中庭は色とりどりの草花で彩られており、冬であることを忘れさせる華やかさがある。心地よい花の香りを感じながら中庭を通過する。

「私は顧問の先生に挨拶してくるから、皆は先に部室に行っててくれる？場所は……わかるよね？」

「はい、大丈夫です」

「ならよし。じゃあ、お願いね」

汐留先生が職員室があるであろう本校舎へ。私たちはそのまま校舎から抜け、部室棟へと向かう。その間、私は前々から気になっていた質問を投げかけてみる。

「高藤とつながりがあるって聞きましたけど、どういうつながりがあるんですか？」

「それはね――――日向くんが昔、すごいスカイウォーカーだったのは知ってるでしょ？」

「今も、ですよ！」

窓果さんに明日香さんが付け加える。

「それは、勿論。私も憧れましたからね」

「何だか恥ずかしいな、この話……」

照れて顔を隠す昌也さん。窓果さんはそれを知りながら構わず続ける。

「高藤の部長だった真藤さんは……分かる？」

「それも分かりますよ。昨年度の全国大会覇者ですよね」

「うん。その真藤さんも、風翔ちゃんと同じように日向くんに憧れを抱いていたの。で、コーチとして日向くんが復帰したって聞いて向こうから連絡してきたのが始まりだね」

「へぇ……つまり向こうから迫ってきたってことですか？」
「そういうこと～」
　それは驚いた。高藤ほどの規模の学校なら、練習試合などの申し込みはむしろ申し込まれ、施設を貸し出すのが一般的だろう。それが向こうから接触してくるとは、昌也さんの影響力、恐るべし。
「昌也くんがＦＣに復帰してからも、何度か練習試合してるんだよ。その度に引退したはずの真藤さんも参加してて……」
「真藤さん、やっぱり強いよねぇ。世界で戦うだけあるわー」
　真藤一成。私の知る限り彼より多様な戦いのできるスカイウォーカーは居ない。スピード勝負もドッグファイトも出来、メンブレンの操作や反重力を生かした戦法、あるいは荒っぽいラフなスタイルから相手を圧倒する圧迫的なプレイまで。
「あの圧力……正直、怖いです」
「でも、いい人ですよね。何考えてるのか少し分からないですけど、優しいですし……」
　そこで先頭を歩いていた窓果さんの足が止まる。どうやら着いたようだ。
「お、ちょうど皆出てきたところみたいだよ」
　どうやら準備は整っているようで、練習試合に出るのであろうメンバーはフライングスーツに着替えていた。その中でも目を引く、軽くカールしたブロンドのロングヘアを揺らす女性がこちらへ歩み寄ってくる。
「久奈浜学院の皆さん、お久しぶりですわ」
「お久しぶりです、佐藤院さん」
「えぇ、元気そうで何よりですわ、日向昌也」
　口調や声音、髪をかきあげるひと仕草に上品さが覗く、美しい女性だと感じた。佐藤院さんというそうだ。佐藤でなく佐藤院とは、珍しい名前……
「そちらの方が新しい部員ですわね？私は佐藤院麗子。高藤学園ＦＣ部の部長ですわ」
「あ、久奈浜学院ＦＣ部の道真風翔です。よろしくお願いします」

「道真さん……どこかで聞いた名前ですわね。以前もどこかでＦＣを？」
「瀬渡内の方でずっとやってましたね」
「へぇ、瀬渡内で。あちらの方もかなりＦＣは盛んでしたわね」
「ですね。四島ほどでは無いですけど」
瀬渡内はグラシュ特区であるため、ほかの地域に比べてはるかにＦＣが盛んだ。四島はもはや聖地と呼べるレベルのため除外するとしても、一二を争うレベルの規模だろう。
「今日はお互いに有意義な練習試合にしましょう」
「はい、お世話になります！」
佐藤院さん、いい人そうで良かった。人当たりがよく、相手の話題に上手く合わせられるタイプ。つまりコミュニケーションが上手い人だ。
「佐藤院さん、いい人ですね」
「そうだね。佐藤くんは、素直で周りの見れるいい子だよ」
「うわっ!?」
突如後ろから低く渋い声が聞こえて思わず飛び上がる。そこには身長は高く細身、それでいて筋肉質な青年が立っていた。歳は私よりも少し上くらいだろう。
「いらっしゃい、福留へ、そして高藤へ。元部長の真藤一成だ。よろしくね、道真くん」
「あ、道真風翔です。よろしくお願いします……」
真藤一成。現代のスカイウォーカーなら誰しもが一度は憧れるであろうプレイヤーだ。かくいう私も憧れた一人だが、私の場合はむしろ目指すべき指標だったと言えるかもしれない。
「キミのことは知ってるよ。勿論、プレイスタイルもね」
「それは……今は、封印してるんです」
「そうだろうね。日向くんならそうすると思ったよ。彼は王道的ＦＣが好きだからね」
「まぁ、仰るとおりですよ。これは俺の我儘ですから」
この真藤一成という人物は、何でもお見通しなのだろうか。人生経

験がはるかに違うように感じる。
「今は時間が惜しいだろう？早く練習場に行こう。部室で着替えてくれて構わないからね」
「はい、ありがとうございます」
そう言うと彼も練習場へと向かう。私たちは更衣室のある部室へと向かった。

海風が髪を撫でる。少し湿った心地よい風に私はうんと伸びをした。
「んっ――――う」
「いい場所だろう？敷地内にこんな浜があって幸運だったよ」
いつの間にか隣に立っていた真藤さんが言う。ここも学校の敷地なのか、すごいな……
「今日はあくまで合同練習ではなく練習試合だ。自分が試合をするだけじゃなく、ほかの人のプレイからも勉強しないとね」
「そうですね。誰かのスタイルから自分のものにできそうなモノを吸収しないと」
「楽しみにしているよ。『撃墜王』がどう変わるのか――――」
「――――っ！」
後ろ手にひらひらと手を振って真藤さんは高藤陣営へと歩いていく。やはり私のことを知っていた。
「どうした？呆然とした顔して」
昌也さんが私の顔を覗き込んで言う。そんな顔になってたか……
「何でもないですよ、真藤さんと話をしてただけです」
「真藤さん、たまにとんでもないこと言うからなぁ……変なこと言われなかった？」
「それは大丈夫ですよ。問題ないです」

「ならいいんだけど……」
　昌也さんの後から皆もついてきた。選手ではない窓果さんを除く皆、フライングスーツに着替えていて臨戦態勢だ。
「早速始めさせてもらおう。アップもしないといけないし」
「だね。話つけてくるよ」
　こういう時、窓果さんは率先して動く。マネージャーとしては文句なしの働きっぷりだ。少しお茶目が過ぎるシチュエーションもあるが。
「――――アップ、始めてもいいって。練習試合は2フィールドでさくさく回して、午後からレギュラーメンバーを集めて大会形式でやろうってさ」
「わかった、それでいいって伝えておいてくれ。選手は上がるぞ、フィールドフライでアップ。その後軽く動きの確認をして試合に備えてくれ」
「「はいっ！」」
「はぁぁああっ！」
「うっ――――」
　高藤の一年生の背中に白いポイントフィールドが発生する。これで1対5。道真くんとぶつけるにはあまりにも未熟だった――――いや、道真くんが強すぎるのか。
「このっ……あれ？」
　後輩が後ろを振り向いた瞬間には、もうそこに道真くんは居ない。白い尾を引き、振り返るよりも速い速度で背中に回り込む。
　気づいてももう遅い。再びポイントフィールドが発生し、点を奪う。
「……一方的な展開ですね」

「あんまり一年をいじめないで欲しいんだが……まぁ、彼女も葛藤しているからね」
　そう言うのは僕ともうひとり、桃色のショートヘアに犬の耳のように垂れ下がる髪飾りが特徴の少女。幼さの残る顔は生真面目そうな表情で空を眺めていた。
　市ノ瀬莉佳。高藤の次期エースで、真面目さが一番のウリの優等生だ。真っ直ぐな性格かつ努力家で、才能の不足分を勉強と努力で補おうとする。まぁ、それゆえに読まれやすい部分もあるが。
「にしても、すごいスピードですね。私が知る中では一番かも」
「いや、間違いなく一番だと思うよ。あのドッグファイト中の速さは」
　彼女の技術に加えて、あのグラシュ。常人なら飛ぶことも出来ないほどのシロモノだ。
「僕でも追いつけないだろうね。捕まらないことは可能かもしれないけど」
「珍しいですね？真藤さんがそんな自信なさげな」
「自信が無いからね。彼女の反応の鋭さはＤＶＤとかで何回か見たけど、市ノ瀬くんも生で見れば驚くと思う」
　フェイントがまるで通じない。一度捕まると最期、その檻から逃れることは叶わない。
「彼女の本当の能力はそれだけではないんだけど……今日は、見せてくれないだろうね」
「本当の能力……？」
「市ノ瀬くんは知らなくていいことだ」
　そう言って目線を空に戻す。美しく弧を描く白いコントレイルは相手を包み込んだままで、試合終了のホイッスルが鳴る。
「また強敵が増えたね。もっと頑張らないと、インターハイは怪しいな」
「……はい」

「皆おつかれー。はい、お水ね～」
「ありがとうございます……」
午前の練習ではイマイチ掴めたものがなく、私は不完全燃焼だった。私のスピードについてきてくれないのでは作戦も何もない。速度で翻弄『してしまう』のだから。
「皆さん、お疲れ様です」
「あ、莉佳ちゃん。お疲れさまですっ」
「おつかれにゃ～」
柔らかな声音で挨拶に来たのは桃色のショートヘアの少女。全身をピンク色でコーディネートしているにも関わらずぶりっ子っぽさを感じさせず、むしろ派手な桃色を本人が引き締めているような印象を受ける。
「あ、初めまして。市ノ瀬莉佳です」
「道真風翔です。よろしくお願いしますね」
「莉佳ちゃんは、時々ウチの練習に付き合ってくれてるんだよ」
「いえ、私がお邪魔してるだけで……むしろ迷惑なんじゃないかって」
「何言ってるんですか、大歓迎ですよ！」
久奈浜のみんなともかなり仲がいいようで、すっかりと溶け込んでいる。
「食堂に行きましょう。今日もご飯が出るみたいなので」
「わーい！高藤の学食美味しいんだよね～」
「私も高藤の学食好きです！種類も多いですし、ヘルシーですし」
みさきさんと真白さんはどうやらここの学食がお気に入りらしい。明日香さんや窓果さんも声には出さないながらも表情に出ている。女子の勘か、そう読み取れた。
「しっかり食って、午後に備えないとな」
「……ですね」
午後が私の本題。新たな発見が、きっと待っている。

正統派

海風が頬を叩く。風向きが入れ替わり、海から吹き上げる湿っぽい風が福留島を撫でていた。心地よい昼下がりに、私は何を考えるでもなく海を眺める。

「……どうかしましたか？　風翔ちゃん」

「明日香さん。いや、何でもないんですよ。この湿った空気が好きなだけで」

「わかります。気持ちいいですよねぇ」

私の横に立つ明日香さん。スラリと伸びた四肢は鍛えこまれたようには思えないほどに柔らかな曲線を描き、艶やかに輝く花のような桃色の髪がそれを彩る。こんなにキュートなルックスでありながら、かつては世界大会へと駒を進め、バランサーカットという新境地を切り開いた天才スカイウォーカー。

人は見かけによらない。真藤さんのように強者のオーラを漂わせる人物もいるが、そうでない人物の方が多い。明日香さんはその代表格とも言えるだろう。

「……はっ、いけないいけない。風翔ちゃんを呼んでくるように言われたんでした！」

……こうして抜けているところも含めて。

浜辺に集められた久奈浜学院ＦＣのメンバー。皆真剣な表情だ。

「皆集まったな？　高藤との話し合いでオーダーが決まったから発表するぞ」

まるで公式戦前かのような緊張感に包まれている。それもその筈。高藤学園は四島のトーナメントを勝ち抜くにあたって避けては通れぬ壁であり、いずれ公式戦で相まみえるライバルなのだから。

「トップバッターは真白でいく。次鋒はみさき」

「さ、最初ですか……緊張してきた」

「おっけー。任せてよ」
　いつになく真剣な表情で二人は頷く。
「三番手は明日香。で、その次に風翔が入ってくれ」
「じゃあ、トリは昌也さんですね？」
「あぁ。ま、諸事情あるんだ。本当は風翔を入れたかったところなんだが」
　さらっと大将にされるところだった。副将でまだマシといったところか。誰が出てくるのか知らないが。
「ともあれ、試合はすぐに始まる。真白はフィールドへ。みさきはアップに入ってくれ。他のみんなはストレッチと観戦だ」
「「はいっ！」」
　この返事にも昌也さんへの信頼が現れている。コーチとして認めているからこそ、コーチとして接する事が出来るのだ。

　空に描かれる、金糸のように滑らかな軌跡と、迸る電撃（アーク）のように力強い軌跡。みさきさんが描く鋭角的なコントレイルを柔らかくいなすかのように駆け回るのは佐藤院さんだ。
　佐藤院さんの巧みな回避に、みさきさんはイマイチ自分のペースに持ち込めていない。攻撃の手を緩めないことで優位を保っているものの、決め手に欠けたままではいずれ逃げられる。
「ローヨーヨーでもう一回頭を取れ！」
『分かった！』
　Uの字を描いて鋭角的なローヨーヨー。その爆発的な速度を以て優位を取り続ける。それでも、佐藤院さんの防御は崩れない。
「何か特殊な技を使っているわけでもないのに……本当に上手い人ですね」
「立ち回りが上手いんだよ。無理に切り抜けようとせず、安定した姿

勢を保って防御する。そしたら、攻撃する側は一方的にスタミナを使わされるんだ」

ファイターであるみさきさんは、オールラウンダーの佐藤院さんを攻略するために攻めることしか出来ない。攻撃の手を緩めれば、速度差で一気にブイまで逃げられるからだ。

「積極的に触っていけ！　防御を崩してからラッシュをかけるんだ！」

『分かった、どこでもいいから、触れる！』

火花のような反重力のエフェクトと同時に、二人の距離が開く。一度でも速度がゼロになれば、初速に優れるファイターが有利。メンブレンの壁を蹴りつけてみさきさんが動く！

しかし、その時だった。

黄色のポイントフィールドが発生する。はじき出されたのは、なぜかみさきさんだった。

「い、今のは……!?」

目が追えなかった。それほどまでに鮮やかな得点だった。投げ出されたみさきさんも目をぱちくりと見開いて、状況の整理に追われている様子だ。

「佐藤院さんは、横にステップするように躱して、すれ違いざまに背中を触ったんだ。リバーサルの応用だよ」

基本的に攻撃を行う際には、まっすぐ相手に向かって突っ込むことになる。その一撃を交わし、まるで自動改札にＩＣカードをタッチでもするかのように得点した、ということだろう。

「すごい観察眼だ……私には出来ない」

みさきさんの攻撃を見切って躱すまでなら可能性はある。だが、そこからあんなにスマートに攻撃に転じることは出来ないだろう。

「攻撃してくるぞ！　構えろ！」

『――！』

佐藤院さんは上をとって、猛禽が地上の獲物を狙うかのようにその優位を活かして攻撃を繰り返す。みさきさんはそれに対して防戦一

方。これが上方の有利。
「みさき！・『スモー』だ！・」
『あれね、了解！・』
『スモー』。去年の秋にみさきさんが見せた背面飛行戦術。上方の有利を帳消しにして、攻撃のチャンスに換える変則飛行。切り札とも言えるテクニックだと思うが、それを繰り出してでもこの苦境を乗り切る必要がある。
バチ、バチと繰り返される接触。その度にみさきさんは背面ローヨーヨーで再加速、佐藤院さんはハイヨーヨーでその上昇先へと突っ込んでいく。そして幾度も火花が散ったところで、佐藤院さんが動く。
『あれ!?　昌也、佐藤院さんは!?』
みさきさんが佐藤院さんを見失った。それもその筈。佐藤院さんが繰り出したのは――
「『スモー』を解け！　佐藤院さんは……下だ!!」
両手を大きく広げて急減速した佐藤院さんは、若干姿勢を崩しながらも、足を縮めて加速体勢に移行した。急減速から、メンブレンを蹴りつけて急加速するトリッキーな高等技術。
「……コブラを、使ってくるなんて」
みさきさんはスモーを辛うじて終了し、胸元でその掌を受け止めた。しかし攻撃のチャンスを掴むことはできず、勝負は2　対　0で佐藤院さんの勝利となった。
試合は進み、明日香さんの試合は彼女の勝ちで幕を下ろした。次は私の番だ。
「風翔ちゃん、頑張ってくださいね！・」

「うん、頑張るよ。行ってくるね」
ハイタッチを躱して、宙に踊る。脱力してリラックスし、ファーストブイへ向かう。そこに待っていたのは、桃色のショートヘアの少女。市ノ瀬さんだ。
「道真さんが相手ですか。全力で行きますね！」
「私こそ。恥ずかしくない試合をしますね」
空中で握手は交わせないため、軽く会釈をしてスタートの姿勢を作る。そして一瞬の静寂の後……
「セット！」
時が止まったかのような緊張感。その緊張の糸が、ホイッスルの号砲で断ち切られる。
同時に駆け出す水色のコントレイル。私は迷わずセカンドラインへのショートカットを選んだ。
「相手のグラシュはスモールグローブのメインクーン……ならスピーダーか」
その予想を肯定するかのように、市ノ瀬さんはぐんぐんと速度を上げていく。あれは止めるのも一苦労しそうだ。
セカンドライン上に到着したので、ライン上で動きを止める。通常のファイターなら旋回を続けて速度を維持するが、私の場合は初速が異次元の速さなので、停止していたほうが相手の挙動に対する対応力が上がる。接近してくる市ノ瀬さんの瞳を見つめる。
目が泳いでいる。フェイントをかける先を読まれないためだろうが、指先への力の入り方である程度の予測はできる。
「……右だ！」
電撃のようなエフェクトを生じ、二人の距離が開く。私はそれを一気に詰めて背面を狙う。しかし市ノ瀬さんも反射神経で下へと逃げた。それを追撃して下降するが、それが彼女の狙いであることに気がついて後を追うのをやめた。エアキックで直角に軌道を変え、上昇してくるであろう市ノ瀬さんの頭を押さえる。
市ノ瀬さんはそれに対して、可能な限り高度を揃え、左右に揺さぶりながら接近してくる。しかしそれも、視線で行き先が丸見えだ。

「……下っ！」

真っ向から向かっていくように降下。背中に触れようとするも、それは手で弾かれる。お互いの位置関係は上下に開き、再び状況は同じに。ローヨーヨーで加速してブイを目指す市ノ瀬さんが加速しきる前に正面に回り込んでドッグファイトへ持ち込む。

バチ、バチと何度か弾きあった後、私の手は彼女の背中に届いた。ポイントフィールドが発生し1　対　1。セカンドブイの分を取り返した。しかし彼女はその反動で加速、サードブイに触れた。

『風翔、ショートカットだ』

「分かりました」

その言葉を聞いてサードラインへと進む。おそらく市ノ瀬さんはこのパターンで点差を維持するつもりだ。

予感は当たり、試合時間は残り3分、得点は4　対　5。いよいよ切羽詰ってきた。

『風翔が良ければ、なんだが、一つ提案がある』

「何ですか？　その提案って」

市ノ瀬さんに攻撃を加えながら昌也さんの言葉に耳を傾ける。インコムを通じて聞こえた彼の言葉は、予想しなかったものだった。

『本来のプレーを解禁してもいいよ。今回だけ』

「……分かりました」

もう疑問を抱いている時間は無い。その狙いは分からないが、いつものプレイが出来れば勝機は見える。

「許してくださいね、市ノ瀬さん」

「――え？」

空を彩る火花。幾度も莉佳に触れる風翔。
「急にアグレッシブになったね。日向くんの差金かい？」
「はい。このままじゃ間違いなく負けるので」
何度触れられ、飛ばされても背面を晒さない莉佳の姿勢制御も流石だ。並みのスカイウォーカーなら姿勢を保てず、背を晒してしまうものだが。
「彼女の生真面目さが生きてるね。普通のプレイヤーならサラッと流してしまう緊急時の姿勢制御も、彼女は熱心に取り組んでいたから」
グラシュ使用時に姿勢を乱したときは、手足を広げることで安定を得ることが出来る。その応用で、莉佳は両手を広げて必死に姿勢を整えているようだ。
「だけど、このままだと少し不味いね」
「多分、それが風翔の狙いですよ。じゃなけりゃ自ら背中を取りに行ってますから」
そして、再び手が触れる。今度はただ触れるだけでなく、叩きつけるように強く触れた。その分反重力も強く作用して、莉佳は激しい水しぶきと共に水面に叩きつけられる。
「スイシーダ……やっぱりか」
「水面に押し付けてる時点でそれしかないですよね」
そこに風翔がタッチしにいく。当然背中に触れられ、風翔が得点を得る。これで5　対　5だ。そして離れた距離をもう一度詰め、莉佳をタッチしようと降下した風翔。しかし、その手は水に触れるに留まり、反重力が激しい水しぶきを上げた。
「……あれを躱すのか。よく見てますね」
「実はね、あれは僕が吹き込んだんだ。見ていてご覧。ここからが本当の勝負だ」
莉佳は、水面を蛇が這うかのごとく旋回を繰り返しながら低空を跳ぶ。それに対して風翔が上から何度もタッチを試みるが、それは空を切り、代わりに水しぶきを高く上げる。
「落ち着いていけ！　ペースに飲まれてるぞ！」
『くっ……！』

風翔は勝利へ対する執念が非常に強い。それ故に、チャンスになると冷静さを欠くきらいがあるようだ。噴水のように、何度も高く水しぶきが上がる。

そして、再び風翔が触れようと高度を下げた瞬間に勝負は再び動く。激しい水しぶきに続いて、それを覆い隠すほどの水しぶきが上がる。そして、その水柱は水色の光に染められる。

『……あれ？』

そこには、空中に押し出された風翔と、その背中に触れる莉佳の姿があった。

「い、今のは……!?」

「水面に自ら体を突入させて急減速をかける荒業だよ。道真くんのプレイを予測して、僕がさっき教えた」

「成る程……スイシーダの応用ですね」

スイシーダはそもそも、水に相手を叩きつけ相手の機動力を奪うのが目的の技。逆に言えば、自らスイシーダと同じ状況を作り出せば、急制動に使えるのだ。

鳴り響くホイッスル。この勝負は、５　対　６で莉佳の勝利だった。

砂浜に座り込み、荒くなった呼吸を整える。今の試合は流石にヒートしすぎた。ひとり反省会確定だ。

そこにやってきたのは昌也さん。その少年的な顔で私の顔を覗き込んできた。

「お疲れ様。どうだった？」

「情けないです……あれだけのことをしても勝てないなんて」

「そんなものだ。風翔が思ってるより、ラフプレーは弱い。それに莉佳は、ああいう荒っぽいプレイにはめっぽう強いんだ」

含みのある言葉だ。しかしその予想をかき消すように昌也さんは続ける。

「俺のプレイを見てて欲しい。きっと何かの手がかりをあげられる」

「……手がかり」

私が見失った、答え。昌也さんがそれを示してくれるという。ならば私はしかとこの目に焼き付ける必要がある。

「頑張ってください」

「あぁ、言われるまでもなく」

後ろ手にひらひらと手を振って、昌也さんは空へ。

練習試合の最期を飾るのは、空のエース対決。真藤一成と、日向昌也のフライングサーカスだ。

再起

試合開始のホイッスルで、紫と緑のコントレイルがすっと伸びていく。互いにオールラウンダー故にそのままま っすぐセカンドブイへと飛ぶ。そのまま横一線でブイへと飛びつくかと思われたが、真藤さんはショートカットを選択。昌也さんはセカンドブイに触れ1ポイントを先取し、セカンドライン上で旋回する真藤さんにめがけて突っ込んでいく。

「すごいシザーズ……」

「メンブレン操作の応用で、不規則かつ鋭角的に切り返してますね。すごい……」

私の横で空を見上げる市ノ瀬さん。彼女のまっすぐな瞳は輝く軌跡だけを見つめていた。真面目で勉強熱心だというその性格が窺い知れる。

「だけど相手はあの真藤一成……そう簡単には抜けない」

「えぇ。それは昌也さんも分かっていることだと思いますよ」

緑の光が真藤さんの横をすり抜けようとするが、光が弾けてその動きは止められる。ただ、それは昌也さんも覚悟している事のはず。ここから何を魅せてくれるのか。私が何を学べるのか。

「ひとときも目を離しちゃいけない……全部、焼き付けなきゃ」

一度、二度。マーブル色の光が弾け、ふたりの距離は離れる。

「さっきの言葉、二言はないね?」

「はい。全力でお願いしますよ!」

垂直に近いローヨーヨーで速度を一気に乗せる。ここから上昇に入るタイミングが難しく、下手をすれば一瞬で背中に触れられてしまう。基礎的テクニックだが、使いこなすには奥が深い。

そのまま水面に向けて直滑降を続ける。体がすくみそうになるその直前に、俺はメンブレンの床を蹴りつけた。

「なるほど、そう来るかッ！」

ローヨーヨーは速度を乗せて敵の下を一気にくぐり抜ける技だが、しっかりと速度を乗せたうえでエアキックターンに繋げる。最大速度から反転しての急加速となるため、エアキックターンだけで行うよりも有効的に距離を広げることが出来るだろう。

真藤さんも同じくエアキックターンで転回する。頭を押さえるようにサードブイ側に展開し、同じ高度を並行して上昇し続ける。

「このまま平行線ですか？　真藤さんっ！」

「まさか。ここからさ……！」

次の瞬間、真藤さんの脇腹で光が連続して明滅した。すると螺旋を描くように加速した真藤さんが俺の後ろに一瞬にして着いた。

「僕も進化するのさ。日向くんが思っている以上に……ね！」

背中だけには触れさせまいと上半身をひねる。伸ばされた手のひらは俺の肩を強く押し、突き飛ばされ姿勢を崩したところに更に追い打ちをかけようと手を伸ばす様が見えた。

「させるか……！」

背中を丸めてつま先を僅かに触れさせる。急速にその場で宙返りをして真藤さんに向き直る。しかし。

「そうだろうね。日向くんならそうすると思っていたよ！」

目の前に真藤さんはいない。一瞬の逡巡を挟んでしまったことが、命取りになってしまう。

『昌也くん、上ですッ！』

インカムを通して届いた声。明日香の声だ。上を見ると、メンブレンの壁を蹴って急降下をする真藤さんの姿。それも、急速に前回転をしながら、だ。

「この高度からでも……届く！」

脳天に叩きつけられるメンブレンの衝撃波。感じたことのないほ

どの速度で体は降下を始める。

「あ、あれは……」

「『スタースプラッシュ』……私の技を」

セカンドラインよりもはるかに高い場所で放たれたそれだったが、日向さんは水面に強く叩きつけられてしまう。どれほどの威力だったかは想像に容易い。姿勢を立て直すのに時間を要してしまった昌也さんの背中に、真藤さんの右手が触れた。紫色のポイントフィールドが、得点を取られたことを知らせた。

続けざまに上空の位置を維持し続ける真藤さんに対して、超低空飛行とシザーズを織り交ぜた動きで隙を見せまいとする昌也さん。

「ありゃ……あのままじゃもう1ポイントまでは長くないかな?」

みさきさんの冷静な分析。確かに私もそう思う。だけど、同時に昌也さんがあのまま終わるとは思えない。太くきりりと描かれる若草色のコントレイル。まだその光は力を失っていない!

「どうしたんだい日向くん! まさかこれで終わりじゃないだろう!?」

「もちろん。ここからが勝負ですよ!」

連続的なメンブレンの操作で水面すれすれを加速していく。真藤さんも同じように、上方をとったまま加速してくる。そのまま速度を上げていくと、同じ速度を維持して真藤さんは続行した。

「……ここだッ!!」

右手を水面に触れる。手のひらにかかる強い抵抗を軸にして、体を前後方向に180度反転させた。そしてさらにエアキックターンに繋げ、一気に上方へ躍り出る!

すなわち、一瞬にして最高速度から停止まで速度を下げ、更に急加

速で直上へと向かう連続技。真藤さんの上が取れる！

「なるほど、さっきの僕と、市ノ瀬くんの技の合わせ技か……！」

冷や汗が浮かぶ。デモンストレーションとはいえ、さっきの僕は間違いなく全力だった。『勝つ』ではなく『潰す』と心に決め、容赦なく叩き潰そうとした。しかしそこから一気に窮地に追い込まれた。

「今の技を一瞬で思いついたのか……流石、天才は違うな！」

立場は一変、僕が水面上を這うように逃げる展開だ。正直、非常にまずい。しかしこの展開を楽しむ余裕もあった。こうして優位を取られることに劣等感を感じない。

「いつまでも、日向くんは僕の憧れだからね！」

シザーズから、メンブレンの操作で水面に弧を描くように加速していく。日向くんはそれに合わせて速度をあげる。大きく円を描くように速度を上げていく。時間的に次が最後の仕掛け時だ。ずっと練習していた『アレ』で仕留める！

「何か仕掛けてくる……」

紫色の、混沌としたオーラを感じていた。何かを仕掛けてくる。間違いなく。俺の下を飛ぶ真藤さんの動きを一瞬たりとも見逃さぬように目を凝らした。

次の瞬間。真藤さんはぐるりとこちらに向き直り、背面飛行で追従し始めた。そして手を伸ばし、メンブレンが触れ合う。

「『スモー』!?　不完全だけど、確実に……ッ！」

距離が離れる。横方向にタッチされたせいで左右に距離が開いてしまい、上方の優位を維持できない。立ち位置が水平に戻る。

「行くよ、日向くん！」

彼の背中に、コブラが見えた。とぐろを巻き、こちらを見据えるコブラが。しかしここで戸惑っているわけにはいかない。俺の背中を

見ている人が居る。負けることなど、出来ない！
「まっすぐなプレイで、フェアなＦＣで、目を覚ましてやるッ!!」

一度、二度。触れ合う手のひら。メンブレンの炸裂が閃光を発し、幾度も幾度も距離が離れる。触れては近付き、すれ違い。交差する二つのコントレイルが上空へと昇り、混じり合っていく。
試合の結果は1対1の引き分け。最後の1点は決まらなかった。

夕日の沈む浜辺。昌也さんが隣に降り立った。
「どうだった？　伝わったかな」
「はい。そのまっすぐにぶつかるプレイスタイル……ＦＣの『楽しさ』。再認識できましたよ」
交じり合う軌跡。ぶつかり合う閃光。ふたりの楽しげなぶつかり合いに、私も久しく感じていなかったフライングサーカスの楽しさを思い出した。
「明日からも頑張ります。もっとまっすぐ、強くなりたいです！」
「……あぁ。俺も手伝うよ。一緒に強くなろう」
私の手を取って引き起こす。その手は少年らしい表情とは違って、力強い男性の手のひらだった。

正しい飛び方

鳥籠

今日の晩御飯はオムライス。我ながらとろとろふわふわに出来て、満足。予想以上の出来に写真を一枚撮って、スプーンを入れた。

「……にしても」

ここ最近、先日の練習試合で昌也さんが見せたＦＣが脳裏に焼き付いて離れない。力強くも美しい、迫力のあるコントレイル。あんな軌跡を描けたことが、今までにあっただろうか。

「やっぱりすごいな……努力に裏打ちされた技術と、経験が活きる一瞬の判断力……」

及ばない。やっぱり昌也さんは眩しい憧れのままだ。ブランクがあるとはとても思えない鮮烈な飛行に、私は完全に魅了されてしまっていた。

私もあんなふうに飛べたなら。いや、あんなふうに飛べるようになると決めたのだ。真っ直ぐで、綺麗なコントレイルを残せるスカイウォーカーに。

ふと、スマートフォンに保存されている一つの動画を再生する。それはかつて廣島での地方大会で撮影された映像だ。白いコントレイルと赤いコントレイル。それらは複雑に混ざり合い、絡み合い、空を埋め尽くす光になる。

白い軌跡は私だ。そして赤い軌跡は、私の最大のライバル。かつて廣島最強のファイターと呼ばれた少女だ。そのプレイスタイルはただただ圧倒的。敵の上方を制圧し続け、ただひとつの接触も許さない。

私が力強く、真正面からぶつかるスタイルなのだとすれば、彼女は触れずとも相手を圧倒するプレッシャーを持つスカイウォーカーだった。唯一無二の親友でありながら、空ではその威圧感に足が竦んだ。

私が何か迷った時には、この動画を見る。『今の』彼女のＦＣに勝つこと。見えない敵との戦いに、現実味を持たせるための自分なりのまじないだった。

「……飛びたくなった！」

エンゲイジに足を通し、玄関を駆け出す。

「ＦＬＹっ！」

こんなにも楽しいＦＣは久しぶりだ。今は飛ぶことが、楽しい。

寒空を駆け抜けるコントレイル。海風の吹き付ける海岸で、久奈浜ＦＣ部の練習は今日も行われていた。桃色の軌跡と絡み合う白色の軌跡。

「風翔もだんだん馴染んできたな」

エンゲイジと風翔の相性は抜群にいい。彼女自身、反応速度とねちっこいドッグファイトを得意としているため、一度まとわりついたら離れないあのグラシュは正しい選択と言える。

……ただ。

「やっぱり、明日香にはちょっと及ばないな。みさきとはいい勝負だと思うんだけど」

「そうだね。やっぱり、手の内を知られてたら決め手に欠けるところはあると思う」

みさきが見せたスモーみたいな、分かっていてもどうしようもない技術。繰り出した時点で戦局が大きくひっくり返ってしまうような大技が、風翔には無い。とにかく後出しジャンケンで相手の頭を取り続け、『バードケージ』よろしく封殺するのが彼女の最大の戦略だ。

しかしそれでは、圧倒的スピードを誇る全国レベルのスピーダー相手には戦えないだろう。それこそ乾なんかがいい例で、彼女のグラシュ『アグラヴェイン』のもつ圧倒的速度とリミッターを解除したグラシュをねじ伏せる彼女の手腕は、本物の天才である明日香をいとも簡単に窮地に追い込んで見せた。

そもそもだ。乾のバードケージは俺が真っ向から否定したものであって、その戦術で戦うのは筋が通っていないというものだ。何とか彼女に合った戦術を考案してやるのが、コーチ兼任の俺の役目だろう。

「……まだ道のりは長いな」

風翔の才能がどう活きるか。俺にかかっていることを再認識し、妙な重圧を感じるのだった。

とある離島。人口わずかの島の上空に描かれる、幾何学模様の如きコントレイル。かたや、鮮やかなグリーン。かたや、深海のような深いブルー。

「……ッ」

乾沙希は狼狽していた。この少女の戦闘力に。

戦場を支配する王者。地上で言うところの虎かライオン。そんな圧倒的威圧感と、実際に私に襲いかかる圧倒的な力。かつての私とは少し違う、それでいて同じ本質を持つ飛び方だ。

私の作り出す鳥籠に囚われることなく、更に大きな檻を作り上げて私を支配する。これが純然たるファイターの実力か。

「……アブルホールの、新型……」

彼女の技術もそうだが、履いているグラシュも圧倒的な性能だ。半

ば私専用に作られたアグラヴェインだが、彼女のグラシュは更にその上を往く。瞬発力こそないものの、速度、旋回性能共にこちらを凌駕している。

蒼の軌跡が鋭角的に描かれる。気圧されて動けない私の背中に、手が触れる。

「……悔しいけど、私には」

届かない存在。あの桃色の軌跡を見た時と同じ、敗北感を感じた。私の後ろで笑みを浮かべる少女は、私よりも強い。